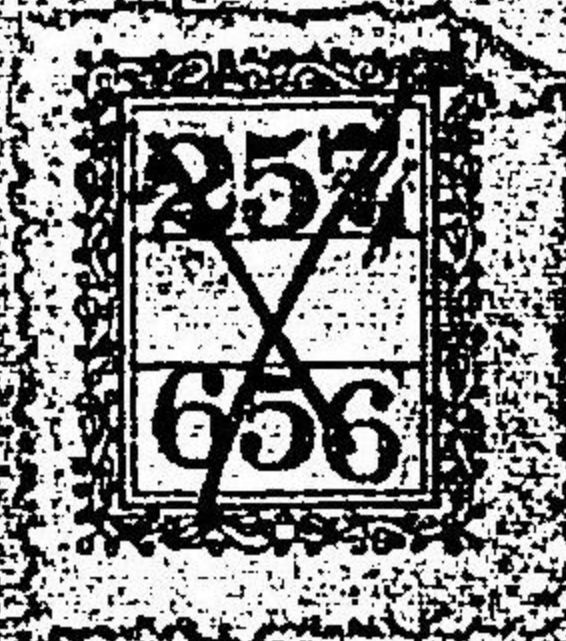


通俗  
新話

衆  
禪  
の  
活  
路





特21  
820

通 俗  
話 話

參 禪  
の 活 路

明治  
41 10 22  
函 奏



通俗新話 參禪の活路

神旨篤倫述

一因百果

よくさけば、ほたるぼとなる、烟草の火  
ゆだんをすれば、早かねの聲

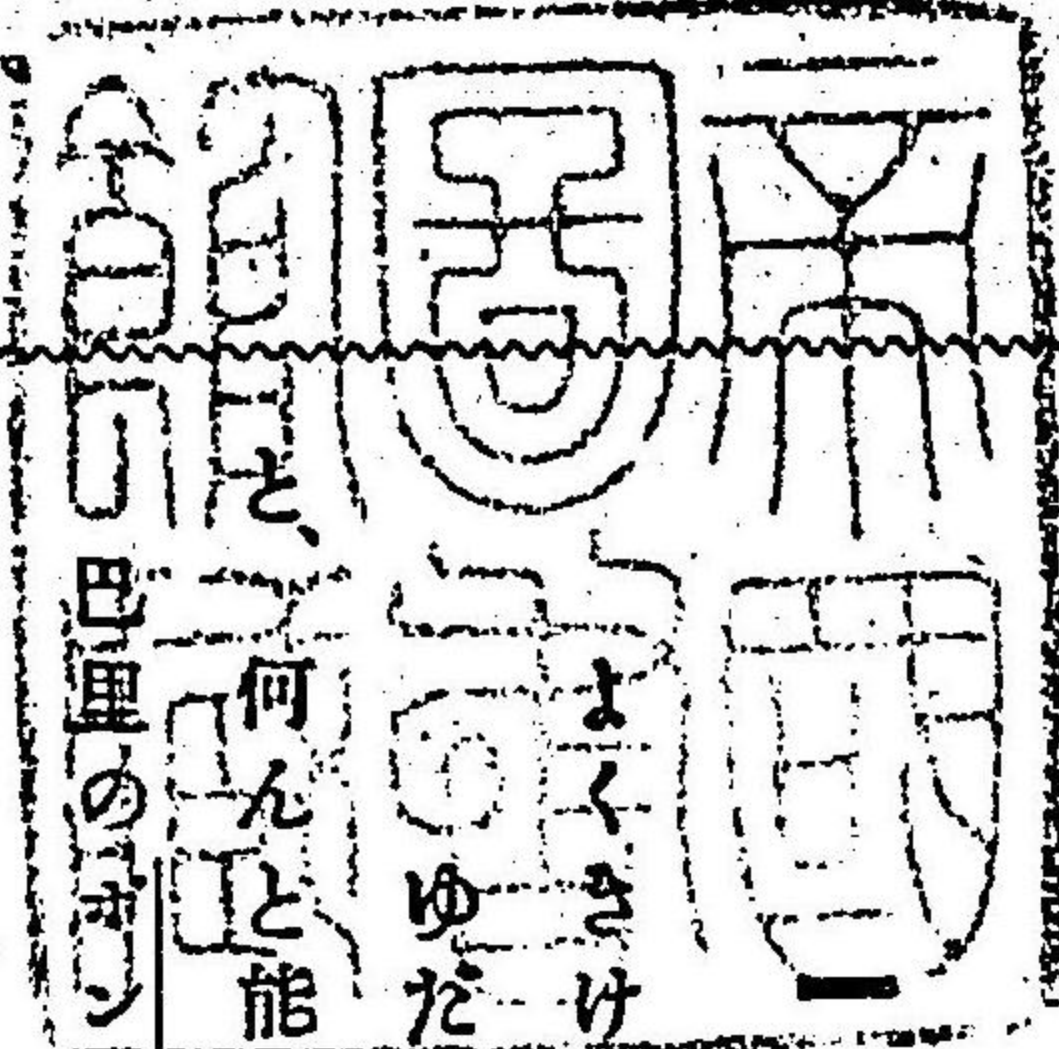
何んと能く眞理を穿ちたる道歌ではありませぬか、

夜のこと、ライシヤールは自宅の二階にて、獨り玉突の遊技を試みつゝあり

けるに、如何なるはづみにや、ポント強く突ける玉は、球臺より高く飛び窓

を抜け隣家なる屋上の窓に墜落して玻璃蓋を破壊し、玉は下降して客間にあ

る美麗なる花瓶の上に直下し爲めに花瓶は微塵に破はされた、時に會々その





二  
傍に居眠りいたる小猫は、此物音に打ち驚き、ヒョイと跳上がらんとするや、傍なるランプを覆へした、火は恰も手遊の亂玉花火の如く飛散し、遂にテール掛より窓掛に燃へ移り今や大事に及ばんとするや消防夫は馳せ來りて、これが消火に力を盡しければ、事、大事に至らざりしが、この家の受けたる損害は多大なるものにてありし、尙且此のライシヤール先生は、隣家の姪女と既に結婚の約が纏りてありしが、病床にありし伯母は此不時の罹災に益々重病に入り遂に逝去りました、不日花嫁たらんとする姪女は、伯母の該災を因として死に就きたるをいたく憂慮し、その悲哀に堪へずして、遂にライシヤール氏に既約の結婚を拒絶したとのことである、

と、これいかに虚そらしき談話に過ぎざれども、一因百果を生むとはこのことである、されば梵網戒經には、  
小罪を輕んじて以て殃なしとすることなかれ、水の滴り微なりと云へども、漸く大器に充つ、刹那の造罪、殃無間に入る、一度、人身を失つれば、万劫にもかへらず、

と、總て物事は、小事より大事に及び一より百、百より千を生ずるものなれば、決して油断してはなりません、

油断こそ大敵なりと、心得て、

堅固に守れ、己が心を、

と、吾人はこの訓誡を忘れてはなりません

## 二 無心の心 其一

心猿飛び移つる五欲の枝、

意馬馳走す六塵の境、

と、吾人は常にいろ／＼の煩惱妄想の爲めに心が取り止めもなく、彼方に行き此方に徘徊して、恰も動物園の猿が飛び廻るが如く、又野馬の東奔西走すると同様に心が散亂して、ドーカ妄想をいたすまいと思へば、思ふ程、心に種々と考へが浮んでくる古歌に

迷はじ、と思ひながらに、迷ひけれ



迷の中の、迷たどりて

これが吾人の常であります、殊に先の方から二百三高地の辨天様でも御入來ましますと忽ち心緒が亂れる、甚だしきは破廉恥にも及ぶやふなことがある、是等は皆無心の修養が足りないからである一休和尚も、

兩眼に、明らかなるを、持ちながら

女に逢へば、目なしとぞなる

と、或人を戒められたことであるが、兎角此の思想と云ふものは、五官を通じて常に出沒去來して居るものである、然り而して、此禪に於ては、能所泯絶のうじょみんけつと申しまして、有心を去り無心々々大無心の境界けがいにならなければ、眞の修養はてきぬのであります、澤菴禪師、有心無心のことを説いて云く

有心の心と申すは、妄心と同じことにて、有心とは、アルコ、ロと讀む文字にて、何事にも一方へ思ひ詰る所なり、心に思ふ事ありて、分別思案を生ずる程に有心の心と申し候、無心の心と申すは本心と本心と申すは一所に留らず、全身全體に延び廣がりたる心にて候同じ事にて、固り定まりたる事な

く分別も思案も何も無き時の心、身に廣がりて全體に行き渡る心を無心と申すなり、どつこにも置かぬ心なり、石が木のやうにてはなし、留る所なきを無心と申す也、留れば心に物があり、留まるところなければ、心に何も無し、心に何もなきを無心の心と申し、又は無心無念とも申し候、此無心が心に能くなりぬれば、一事に止らず、一事に缺かず、道に水の湛えたるやうにして、此身に在りて用の向ふ時出て叶ふなり、一所に定り留りたる心は自由に働かぬなり車の輪も堅からぬにより廻るなり、一所につきたりたらば、廻るまじきなり、心も一事に定むれば働かぬものなり、心中に何を思ふことあれば、人の云ふ事をも聞きながら聞えざるなり、思ふことに心が止りゆくなり、心が其思ふ事に在りて一方へかたより、一方へかたよれば、物を聞けども、聞えず、見れども見えざるなり、是れ心に物ある故なり、あるとは思ふことがあるなり、此有る物を去りぬれば、無心の心にして唯用の時ばかり働きて其用に當る、此心にある物を去らんと思ふ心が又心中の有る物になる、思はざれば獨り去りて自ら無心となるなり、常にかくすれば何時となく、後は獨り位



へ行くなり、急にやらんとすれば行かぬものなり、古歌に

思はじと、思ふも物を、思ふなり

思はじとたに、思はしやきみ

と、吾人はこの無心の心を常に養はねばならぬ、

昔し禪家に圻山、徳翁と申す、二大學匠がありました、この二僧が備中へ参る途中に、或る河を渡らんとするや、丁度雨後水かさ増し爲めに一人の美人河邊にたゞずみ頓と困難の体なりしかば、徳翁これを憐み玉ひ、その美人を負ふて川を渡り、その困難を救つてやりました、圻山は徳翁の所爲に就いて甚だ面白からざれば、稍々久しくして、後、徳翁の所爲を破戒なりとて、大に戒ましめければ、徳翁の曰く拙僧は背負ふところの美人をおろしてより時既に久しきも、貴僧は、まだ、あの美人を背負つて忘れずにいるかと云はれたとある、

と、これと同様なる話しが環溪和尚と坦山和尚の行脚時代にもあつたと思ふが、圻山和尚とても敢て、思想していたと云ふ譯ではないが、この徳翁和尚の、禪

機は所謂有心を去り無心の心に、遊化自在なるところは何んと味はいがあるてはないか、

我もなく、人もなきさの、うつろ舟、

川はがりこそ、乗ると見えける、

### 三 無心の心 其二

曹山僧に問ふ、物に應じ形を現ずる水中の月の如くなるときいかん

僧の云く、驢の井を覗るが如し

山曰く、道ふことは即ち煞た道ふ、只だ八成を道得たり、

僧云く、和尚又た作麼生、

山曰く、井の驢を覗るが如し

と、諸君は、前の澤菴禪師の垂示に於て充分領解せられたであらうが無心とは空虚の意味ではない、吾人が活動する上に於て、須らく着味を拂つて、無爲無心となりて、罣碍するなきを云ふのである、委しくは、曹山と僧との趣きを味つ



たら一層明瞭になることとあります、曹山の問ひは、吾人が活動の處々身處々現なる恰も太虚を照す月の如くなるときはどんな様子じやと、無心の面目を問ふたのである、

僧の云くへい、驢馬が井戸をのぞいたやうな調子で一向忘想分別はありませんねと答へた、ときに曹山禪師の云くア道ふことは甚だ道ふ、答としては充分のやうじやが靴を隔ててかゆきをかくの嫌があるよと云はれた、  
ときに僧の云く、然らばあなた言ふて御覽なされと申された、  
ときに曹山の曰く井が驢を見るのでなければ眞の無心の境界ではないと云はれた、とのことである、

これが眞の無心じや、更に蛇足を添へて置かん、

黄檗の萬丈和尚に参じたる平井ト堂は後、高津柏樹翁のところにて於いて趙州の無の公案を授かり實參實究、遂に大悟せられた、ト堂氏その所解を述べて云く、

夢さめて、見れば恥かしい、寐小便

とやらかした、これを萬丈和尚に得意になつて證明を請ふた、時に萬丈和尚は直に書を齎らして云く

恥かしいと、まだ夢さめぬ、ねぼけ坊、

と、云はれたとある、

ト堂の言ふところは、以つて彼の僧の驢の井を覗るが如しに、萬丈和尚の回報は、以て彼の曹山和尚の井の驢を見るが如しに、相符合すと云ふべきである、  
いへば、うし、いはねば胸に、さあかれて、

思はぬ先や、佛なるらん

あゝ天下幾萬の修養の士よ、父母未生以前に向つて無心の心を問へ、若し父母死して世にあらざれば、養鶏家のところに行いて、卵中の鶏鳴を聞け、

天地の、開けぬ先に、唱ふるらん

卵の中の、鶏の聲

絶學無爲の開道人は晩方ノコゝ鶏屋へ出掛けて卵を買つてきて、床の間に据へて眠りに就いた、



東天紅……………やあー一番鳥じや夜があけるな、

又程なく

可見路々々々……………やあ二番鳥じや

丁稚は起きて戸を開けた。下女は釜の下にたきつけたやうじや、妻は床をたゝみかけた、ヤア外は人が通り出したわい、

又

國家孝行々々々々……………ヤア三番鳥じや、

何んだが女中と妻と口論を始めたやうじや、頼りき國家孝行と鳴いていた卵中の鶏も鳴くの急に止めてしまつた、そのかわりに何んだかブツ／＼云ひたした、ハハア、鶏が折角の教訓を無視して口論を始めたから立腹したのがしらん？

又、

ペカッコウ／＼／＼

さて／＼卵中の鳴き聲は面白いものであるわい

諸士はこの聲をきくことを得たるか、若し未だきかざれば、無心の耳を持つて聞くことを養はねばならぬ、

#### 四 心の置きどころ

いかに無心の心を修養いたしましても、その心の置きどころが悪いと、何のの間にか、何れへか逃げ去つてしまふ、

移り行く、初め終りや、白雲の、

あやしきものは、心なりけり、

て、實にあやきものはこの心である、されば吾人は、この心の置場をとり定めなくてはならぬ、その置きどころとはつまり運用に外ならぬのであるが、これを淨慧禪師は下の如く示されてある、

心を何處に置かうぞ、敵の身の働に心を置けば、敵の身の働に心を取らるゝなり、敵の太刀に心を取らるゝなり、敵の太刀に心を取らるゝなり、敵を切らんと思ふ所に心を取らるゝなり、我太刀に心

心の置きどころ



を置けば我太刀に心を取らるゝなり、われ切らじと思ふ所に心を置けば、切らじと思ふ所に心を取らるゝなり、人の構に心を置けば、人の構に心を取らるゝなり、兎角心の置き所はないと言ふ、或人問ふ、我心を兎角餘所へやれば、心の行く所に志を取止めて敵に負けるほどに、我心を臍の下に押込めて餘所にやらずして、敵の働さにより轉化せよと云ふ、尤も左もあるべきことなり、然れども、佛法の向上の段より見れば、臍の下に押し込めて餘所へやらぬと云ふは、段が卑きし向上にあらず、修行稽古の時の位なり、敵の字の位なり、又は孟子の放心を求めよと云ひたる位なり、上りたる向上の段にてはなし、敬の字の心持なり、……臍の下に押し込んで餘所へやるまじきとすれば、やるまじと思ふ心に心を取られて、先の用かけ、殊の外不自由になるなり、或人問ふて云ふは、心を臍の下に押込んで働かぬも、不自由にして、用が缺けは、我身の内にして、何處にか心を置く可きぞや、答へて云く、右の手に置けば、右の手に取られて身の用缺けるなり、心を眼に置けば、眼に取られて身の用缺け申し候、右の足に心を置けば、右の足に心を取られて、

身の用缺けるなり、何處なりとも一所に心を置けば餘の方の用は皆缺けるなり、然らば、則ち心を何處に置くべきぞ、我れ答へて曰く、何處にも置かねば、我身に一ばいに行きわたりて、全體、延びひろごりてある程に、手の入る時は、手の用を叶へ、足の入る時は足の用を叶へ、目の入る時は、目の用を叶へ、其入る所々に行きわたりてある程に、その入る所々の用を叶ふるなり、萬一もし、一所に定めて心を置くならば、一所に取られて用は缺くべきなり、思案すれば、思案に取らるゝ程に、思案をも分別をも残さず、一心をば總身に捨て置き、所々止めずして、其所々に在て用をば外さず叶ふべし、心を一處に置けば偏に落つると云ふなり、偏とは一方に片付きたる事を云ふなり、正とは何處へも行き渡つたる事なり、正心とは總身へ心を伸べて一方へ付かぬと言ふなり、心の一處に片付きて一方缺けるを偏心と申すなり、偏を嫌ひ申し候、萬事に堅つたるは偏に落つるとして道に嫌ひ申す事なり、何處に置かうとて思ひなければ、心は全體に伸びひろごりて行き渡りて有るものなり、心をば、何處にも置かずして、敵の働さによりて、當位々々心を其所々にて



一四  
可用心歎、總身に渡つてあれば、手の入る時には手にある心を遣ふべし、足の入る時には足にある心を遣ふべし、一所に定めて置きたらば、其置きたる所より引出し遣らんとする程に、其處に止りて用が抜け申し候、心を繋ぎ猫のやうにして餘處にやるまいとて、我身に引止めて置けば、我身に心を取らるゝなり、身の内に捨て置けば、餘處へは行かぬものなり、唯一所に止めぬ工夫是れ皆修行なり心をばどつこにも止めぬが眼なり、肝要なり、どつこにも置かねばどつこにもあるぞ、心を外へやりたる時も、心を一方に置けば九方は缺けるなり、心を一方に置かざれば十方にあるぞ、  
と、所謂八風來や八風打、十方來や十方打、旋風來や旋風打と云ふ、密室に風を漏さざる、一無位の真人の日用底これこの心の置きところてあります

## 五 一塵一境

一莖草を拈じて丈六の金身となし、一微塵裡に入つて大法輪を轉ずるとは、禪の奥義でありますれば、柳は緑り花は紅ひ雀はチエー鳥はカー、宇宙間にあり

とあらゆるもの、一塵一境悉く禪の福音でありますれば、吾人の修養も亦た一塵の上、一境の上、毫も看過することは出来ませぬ、されば吾人の修養は、どんな、些々たることにも注意を拂ひまして、決して、その勞を吝んではなりませぬ、然るに人往々にして大事なるときは之れを重んじ、小事なるときは之れを看過し、僅かな勞を吝むことは、吾人の常であるが、これは大に注意すべきことであります。

獨逸の聯邦國のある君主が公衆に一の訓誡を與へんものと、夜間人知れざる  
とき、大なる石を街の中央に置きけるに、翌朝早々一人の農夫は、荷車を挽き來りこれを見て曰く、何んと此大石を街路の中央に出し置くとは、獨逸市街の不面目ならずや、と、大に罵言をなしけるが敢てこれを取り除かんともせず、己れの車を石に觸れざる様注意を拂ひ、通り過ぎた、又次に馬に乗りたる紳士來りけるに、馬は此大石にぶつかりて驚き、跳ね上らんとせしに、  
そ、此紳士は、大聲を上げ、管理の不注意を散々に罵倒して去りたり、その次に來れるは一人のほろ酔ひ氣げんの軍人なりしが、いかにしけん此石に跌



きて仰のけざまに倒れければ、層一層の怒りを顔に顯らはし、糞、膾、に罵りて立ち去りたり、而して其他幾百の通行人は、これが爲めに迷惑せざるものはなかりしが、公衆は、唯之れが不注意を云々するのみにして、开を取り除かんとするものは一人とてなかりき、斯の如くして石は一ヶ月餘も依然としてそのまゝありければ、君主は令を發し市民を召集し、自ら現場に臨み一同に宜言して云く、此大石は朕が此に据へ置きしなり、日々に通行するものは群をなす、併し、その不當を云々し、管理の不行届、罵詈するものありと云へども、これを取除かんとするものは、一人もなし、依つて朕自らこれを取り去らんと、大石を動かしたるに其下に一個の蓋あり

「この石を取り除きたるものに與ふ」と記してあり中には、美しい指環一箇と金貨二十枚を入れあることを示しけるに、公衆は何れも己れの勞を吝めることを後悔しけると云ふ

此教訓は、吾人が些々たる石にも我勞を勞とせず、注意を拂ひて實踐躬行すること戒めたるものである、されば禪の修養は、此教訓の如く、一塵一境に、己

れの意を注かねばならぬ、決して一事をば管看し一事をば管看せざる如きことありてはその修養法に背くのである。

自ら手から親しく見、精勤誠心にして作せ、一念も疎怠緩慢にして、一事をば管看し、一事をば管看せざれ、功德海中、一滴も也た讓ること莫れ、善根山上、一塵も亦積むべきか

と、元古佛の教訓はこれ吾人が修養の箴とすべきであります

## 六 不偏不黨

或る愚かもの一日肩に大なる床板を擔ぎて、或る町を通りけるに、家に歸りて父に告げて曰く、兼ねて聞きたる某市街は繁華なる美しき街ならんと思ひの外、あれだけの街にして、片側の街とは甚だ遺憾なことではないかと嘆息をいたしたと云ふことあります

これ彼の愚かものは、己れの肩に板を擔げること忘却して、某市街を片側なりと是認したのであります、古來これを一方向きの擔板漢と申しますが、所謂



己れの修養の一方に偏し、他の一方の修養の欠けたるを戒めたものであります。兎角吾人が修養なるものは、一方に偏し易く、圓滿なる修養は中々困難なものであると見えます。

知る人を知る、伊豆の稻取村と云へば全國に於て模範的の豊かな村と目せられて居ることであるが、同地の村長田村某が、駿河の杉山村片平某に逢ひ種々同氏より其の經驗談を聞きし折柄、己れの施術治政の態度を得意にないて述べ立てますると、片平某は、から／＼笑つて申しまするには、

「貴殿の言はつしやることは、貴殿におかせられては餘程得意の様であるがまだ／＼完全とは云はれぬ、まあ能く考へて御覽なさい、物事は總て片寄つてはならぬ、あの馬に荷をつけるのでも、片方のみに附けたら、馬は轉覆してしまふ、丁度貴殿の云ふところは至り盡して居るやうじやが、また片方だけの施政に止つて居る、と云ふのは、成程財を積み立て、居らるることは、充分じやが肝じんな徳を積むことを忘却して居ることであると云はれました。之を聞きたる村長は、大にその感に打たれ早速我着せる羽織と袴とを脱いで

畑へ持ち行きて焼かしめ、嗚呼我は今迄、得意顔をして上位にありしが實に面目なし、須らく村民を善良にしなければならぬ、村民を善良にするには民の心を善くし徳の修養を専らにせざる可らずと、共に農事に力を盡しければ、これが爲めに村は遂に模範的となつたいとのことである。

何んとこれは、趣味ある修養の福音ではありませんか田村氏の成效は正しく片平君の中庸なる修養訓に従ひましたからであります、今禪の修養は須らくこの平等一如、行解一枚、中道、中庸の修養を爲さねはならぬ。

## 七 修養の淺深

禪は以上の如く事々物々見る上、聞く上に於て、能く注意を拂ひて、修養を積むことを教ゆるのでありますか、兎角この初心時代の修養は、どうも、皮相的でありまして、併も、心持ちだけは、充分會得したつもりで意氣揚々たるものを見受けることであるが、つまり、これ等の輩は物に觸れ、事に處して、まゝその過失に陥り易いものであります。



或る禪宗に大層豆腐の好きなお和尚さんがありまして、日日、小僧をして使にやり豆腐を買ふことになつておいた。ところが、この門前に、氣味の悪い、爺おやじが住んで居て、小僧が通ると、如何なるときでも、問答を仕掛け、小僧何處へ行くと尋ねる、小僧は「町へ行くと答へる、爺問ふて曰く、「町へ何にしに行くと尋ねる、豆腐買ひに行く」と、以上の問ひに對して答をしないと通さぬと云ふ始末であつた。小僧は使に出る毎に同じ問答であるから、思やてよとたまらない、或日のこと例の如く、豆腐買の命が下つた、時に小僧は和尚さんに向つて云く、此寺の門前に一人の爺が居て毎日通る度ごとに問答を仕掛けて、實に使は思てくならないと告げた、スルト和尚が云はれるには、ソカ、ナラおれが善い問答を教へてやる、小僧何處へ行くと云ふたら西方へ行くと答へるのだ、而して、西方は何處へ行くと問ふたら、極樂へ行くと答へるのだ、と教へられた、小僧大に喜んで、早速使に出掛けて彼の爺の前まで行くと、相變らず、「小僧何處へ行くと問ふた、小僧得意になつて西方へ行く」と答へた、スルト、西方は何處へ行くと尋ねた、小僧云く、「極樂へ行くと答

へた、時に爺熟く考ふるく、ハナナ、今日は返答が何時とは違ふが、變だなと、思つたが、次に第三度目の問を出して、「極樂は何處へ行くと尋ねた、サ、小僧サンもその答には大に閉口した、三度目の答は和尚さんから教へられてない、と、こゝに小僧も大に困まつて、暫時無言で居りましたが、併し、無言では通して、呉れないから、何んとか云はねばならぬ、小僧よぎなく豆腐を買ひに行くと云つたとのこととであります、

と、これは、つまり、物の道理を半分しか聞かないのを物知り顔、得たり顔をして、得意然たる、似て非なるものを誡めたものであります、禪に於ては斯かる、奥のせまい融通のきかない不自由の漢は、頂上より、甃うづを與へて入つて幽玄の底に沈み出で、いは三昧の門に遊ぶと云ふ、頭出頭没、無碍自在の妙術を得せしむるのであります、

紫野大徳寺の一休禪師、幼少を宗純と申します、宗純僅少の頃より中々英靈の漢でありまして、或時、門前の人來り宗純に向ひて云く、今回私の父上の七回忌に相當致しまするが、御承知の如く貧乏ものゝことであれば和尚さん



を頼むことも出来ない、就てはこの塔婆を書いて建てしは呉れまいかと頼んだ、スルト宗純、ヨシ／＼と諾し、塔婆を取り、墨を一面に塗りまして、貧乏ものに渡してやりますと、貧乏人も餘りのことと思ふたか、早速、住持に面會して、事の次第を告げれば、住持は、取り敢へず一の狂歌をよまれた、

あかるく、行かるい道を、墨で染め、  
死出の旅路を、なんと行くらん、

と、時に宗純小僧直ちに返して云く、

あかるくも、暗くも行くが、佛なり、

死出の旅路に、よるひるはなし、

と、住持また、

あかるくも、暗くも行くが、佛なら、

元の白木で、なぜあさはせん、

と、よめば又々宗純の云く、

とは云へど、元の白木、てあくとさは、

あ身も我れも、くらすぎがなし、

と、讀んだとのことてあります、

これは、これ一場のお笑ひに過ぎませんが、つまり吾人日常の見聞覚知の上にあつて皮相的に流れす能く物事に、心をつけ、眼を開き、周到なる修養をなさねはならぬ

### 八 根本的淘汰

されば禪の修養は、上邊ばかりの修養ではいけない、須く心の奥底まで根本的に修養を積まなくてはならぬのである、若し吾人にしてその自己の本性まで、究明が出来ていないと多くの誘惑の爲めに他土に誘れ、爲めに前項の問答位ではなし、社會國家の上に汚名を流し、己れ一代の失策を演ずるものである、

或る家の宴會の餘興にとて五六歳ばかりの子供が、實に美しき衣物を着け假面を被ぶりに宴席に現れました、甲は貴顯の粧ひ、をなし、乙は貴婦人の扮たちでありまして、その席上に現るゝや、甲乙、は相携へて舞踏を演し出した、



彼等は實に小兒の分際にも似合ざる程、その技藝の巧妙にして一舉手、一投足、席上の來賓をして無量の感を起さしめた、然るに來賓中の一員がその技の巧妙なるに感じ、卓上の柿一箇を取つて、壇上に投じ、その賞賛を表しけるに、これまで、ダンスに餘念なかりし貴顯と貴婦人とは俄かに、狂人の如く變じその柿を追ふて我これを得んと大に相争ひ、その結果、格闘に及び、遂に互に假面を剣き取りければ、いよいよ小童と見えし踊り手は、人間にあらずして、全く猿にてありしと云ふ

あゝ勝惑に合ふて、己れの本性を暴露す、この逸話は、實に現今の社會の實相を能く、穿ち得たものであると思ふ、見よや、身には立派なる學位を有するもの、或は一方の名譽や、位置を双肩に擔へるものにして往々多年の修養と經驗とを水泡に歸滅せしむるが如きは、この本性を暴露したる猿と同様の人物でありまして根本的の修養が欠けて居るからでありますされば禪の修養は、自己の本性を根本的に淘汰して、本來自己の天眞佛の實性を顯現すること眞の修養であります、即ち永嘉大師の云く

無明の實性即佛性、幻化の空身即法身、法身覺了すれば無一物、本源自性天眞佛、五陰の浮雲は空去來、三毒の水泡は虛出沒、この境界に至たるこれ修養の奥底である。

## 九 自己の照顧

兎角人は己れを忘れて人の世話をやきたがるものである、姑は嫁のあらを摘發し、嫁は姑の欠點を夫に告げ、兄は弟の失敗を親に告げ、弟は兄のあやまちを父に傳達をなす、又社會にあはても、他人の行爲を非難し、役員は同僚の所爲を云々し、甚しきは、無根の事實を捏造して、人を罪科に陥し入れる如きはまゝあることであるが、これ實に忌むべきことであります、

去る田舎に老婆と娘と二人暮しの中へ養子を迎へけるに、或晩のこと娘は明日の仕度にと麥を焚いて(俗にえますと云うて、丸麥を前以て煮るなり)居りました、その日の疲れに居眠りを始め、恰も唐茹が大風にあつた如く、彼らにゴロリ此ちらにゴロリ、頭を振り、竈の火は、今にも髪に火が付かんず



る、体たらく、時に老婆は手炙火鉢を抱へつゝ芋を煮て居りおりました。娘の様子を見て何んとか注意を與へんと思ひしが、イヤ／＼今貰ひたての養子の前もあると、息をこらして、芋を積みつゝ眺めて居りました。時に、養子は、庭の隅にて草鞋を造りて居たりしが、計らずも嫁の居眠を發見したが、これも注意を拂らうを、は／＼かりて氣に掛けつゝ草鞋を造つて居りしに、娘は益々居眠り、その中に釜の麥は焦付き、臭はする、釜は、ミリ／＼云ひだした、娘はその物音に驚き目を醒した、見れば御釜の麥は眞黒焦となつていた、時に老婆自身も何んだか變だと願みれば、娘に氣を取られ己れの積みし芋は火鉢の中に積み込み、ボウ／＼燃へ出すと云ふ始末、又養子も娘の方に、夢中になつてありければ、乳頭のなき草鞋を造り上げ乳頭とは草鞋の紐を通す穴でありますは、ことが出来さなき草鞋をこしらへたとのこととあります

何んこの三人の過ちは、各その己を失却して自を願みることを忘れたるものと云ふべきであります、フランクリンは、十三目を立て、日夜反省をなし曾子

は日々三たび反省をなしたとのことである、これこの反省は己れを忘るゝことなく、我あることを自覺したるものである、道元禪師示して曰く、

他の非を辯ぜず、自の非を辯ぜよと

これ修養の福音であります、麥林が

行きあたり、そなたも雲雀、みる人か

又た、

谷川の流れにかけし、丸木ばし、

世を渡るみは、足もとを見よ

と、何んと能く道般の消息を穿ちたる箴言句教であります。

一〇 不満の恩寵

彼のボーブも

月の満つるは、腐くる爲め、

腐くるは月の満つる爲め、

不満の恩寵



と、これ實によい金言であります。兎角世の中の人は一事一物皆を幸福であれ、とその祝福を得んと欲しますが、これ時に却つて、我運命を呪ふものと云ふべきである。されば世の幸福を得んと欲するものゝ多くが、往々その失望、不満に陥りまするが如きは是れその人にとりては、却つて遠大の理想を追求するの動機となり、大なる満足を喚起するの端となれば、寧ろ幸福と云はねばならぬ。

佛蘭西の古き物語に曰く、或る一人の小童あり一日魔神現はれて、一個の絲環と與へて云く汝小童よ、もし汝の運命にして不満なりせば兎も角も、満足であるならば、この絲環に手を觸るゝこと勿れ、汝の光陰は停止して永久に向つて動かざるべし、もし汝の境遇が苦痛にして堪へざれば、須らく此、糸環をほどくへし、汝の運命は、電光石火の裡に變り行くへしと、小童はこの使命をいたく喜びあへり、然るに醜て熟らく考ふるに、我に今保姆の許に支配せられ、一として自由を得ず萬事不都合なれば、せめては十歳にもなりたらんにはと、かの糸環を二まき、三まき、ほくしけるに、小童は忽に十歳の

少年となりたり、されば、今度は、家庭教師の配下に置かるゝに至り學課に遊戯に甚だ嚴格にしてその苦痛や實に忍びざるものありければ、彼の少年は又もや二まき三まき、ほくしけるに、少年は、鼻下に八字の髭を蓄へ、美しき紳士とはなれり、尙青年は、高位榮職につき、且妻をも嫁らんと絲環をほくし一躍して社界の場裡に立ち、一方の首長とはなりたるに、彼れは萬務の繁雜にして、且つ家庭には小兒は群をなし、實に世の復雜なるを思ひ、早く世を子孫に譲り安樂に暮らさんものと又糸をほくしけるに、忽ちその望は充されたりと云へとも、頭には雪を頂き、顔には四海の波をよせ、腰に梓の弓をはり、体力は衰へ疾病は時々に出没し、その苦しみ云はん方なければ、泣くく糸環に最終の手を觸れければ、老人の苦痛は頓に休み、墓標一片の塔婆となり此に永久のかくれ家を得たりと云ふ、初め魔神の現れたるより此時に及ぶ僅か六ヶ月の短日月にてありしと云ふ、

嗚呼吾人は活動の社會に出て、早く運命の糸環をほくすものは、亦短日月の運命を保てるのみ、あい吾人の希望や會々不満に終り、失敗不成功に終ることあり



これ寧ろ吾人の爲めに幸福なりと云ふべきである。されば吾人は、この失敗の中に慰安を求め、不幸中に満足の福音を得なければならぬ。

こゝに或る一人の商人あり某商業に失敗し悄然として家に歸り來りて、曰く、嗚呼我は、失敗せりあゝ吾は破産せり。總てのものを失へりと大に泣き叫びけるに、これを聞きたる妻は、曰く、總てを失へりと、然れども妻は御身の妻としてこゝにあり、次に長男次男、三男、幼き娘も續々出て來り父の兩袖に取り縋り、或はその頸に抱きつき、父よ吾等はこゝにありと、妻は、又述へて曰く、御身は又御身の健康を持ち給ふにあらずやと、時に長男云く父は又働くべく兩つまたの手を持ち玉へるにあらずやと、次男は曰く父よ、兩つの眼を持ち玉ふにあらずやと、娘は出て曰く父よ、佛ぶつさんは父を守り玉ふにあらずやと、四方八方より慰安を與へければ、これを聞きたる父は涙にみせび、嗚呼我は未だ、總てのものを失はざりしなりと、云へりと云ふ

吾人は、多くの修養と多くの經驗とをなす間には、無量の失敗なきにしもあらず、吾人のこれに臨んでや、その中にその恩寵に浴すべきである。これ吾人が

修養の歷程であります。

一一 三十棒 其一

臨濟りんじ 黄檗わうはくに問ふ、如何なるか是れ佛法的々の大意、檗はく即ち打つこと三十棒、かくの如く三度び問ふて三度打たる、臨濟是を疑ふて即ち辭し去つて、大愚のところところに到りて問ふて云く、それがし如何なるか是れ佛法的々の大意と、三度問ふて三度うたる、過ありや、否や、大愚の云く、黄檗與麼いんまに老婆親切なり、爾がために微懼す、什麼有過無過を問ふや、臨濟是を聞きて言下に大悟す。

と、これ臨濟大師が黄檗のところところに三十棒を喫却した、實例であるが、兎角禪門では爲人接化の爲めには、此三十棒を學人に喫却せしめるので、徳山の如きも學僧を見るや直ちに打着をなすのであります。

此頃も或る師家からの話してあつたが、或る僧が三遊亭圓朝の家に行きけるにその書齋に黄檗板の藏經と、縮刷の藏經と都合二部あつたものだから、僧



は取りあへず、落語家の宅に藏經が二部も藏してあるとは、奇態千番じやと申しますと、圓朝は、これをさし、藏經の二部あることは、別に奇体にあらず、恰かも、坊主が、寺に喚と妾と蓄へあるが如し、と云ふた何んと痛たい三十棒ではないか、併し僧も中々それしやだから、その返答に云く坊主の喚と妾とを寺に置くは、救世菩薩の化益を蒙むらんが爲めなり喝と、これも中々響のある三十棒である、又圓朝の云く吾が此藏經二部を藏するは月を標する指の働きを二倍にせんが爲めなりと云放したりと、これ又通身に通徹せる三十棒ではありませんか

さてこれは一笑に附すべき三十棒に過ぎませんが、由來この三十棒は、釋尊より能傳所傳以心傳心し來れるところであつて、三世古今を通じて、世の中の朝寢棒、なまけ棒、恥知らず棒、愚鈍棒、争ひ棒、腹立ち棒、まごつき棒、泥棒等の曲れる棒を悉く打着するところの棒であります、いざや是より、一々その曲い棒、あやくり棒、ひねくり棒、等を打着し見ん、と、これ三十棒自らの見識であります、

黄葉の、三十棒を、あてられて、

身にはれ來たる、蟬のぬけ壳……………一休

一一、三十棒 其二

古人も瓢箪からは駒がてる、横着からは暇がてると申しまして、怠惰もの程、憐れなものはありません、

あるところに、怠惰ものがありました、親兄弟も愛想をつかし、家にあつては却て、用務の邪魔になると云ふので、毎日辨當を負はせて、他に行きて遊ぶことを命じられたらば、怠惰ものは、命の如く日々辨當を背負ふては遊びに出かけました、或る日のこと時は晝頃となりましたが、元來が、怠惰ものでありますから、小腹はへつても辨當の風呂敷包をほどくのが、面例であるから、誰ぞ人が通つたならばこの辨當を半分やるから誰か通行人はないかと皿大の眼を開いて前方を見ますと、折しも、向ふよりすげ笠を頭に冠ふりて、しかも大きな口をあいた一人の乞食同様のものがやつて來た、怠惰者はこれ幸



と思ひ、近づくを待つて早速己れの希望を述べると、先方の云ふには、貴公が折角のお思召は有難いが、僕も先刻から、この笠の紐が解けそうになつてある、それさへ、結ぶのが面倒であれば、大きな口を張つて、紐のゆるみを防ぎてあるのだ、貴公の風呂敷包を解いてやる位なら、自己の笠の紐をしめるわいと云ふたとのことでありませぬか。

何んと、類を以つて集まるとは云へ、そろいもそろつた、怠惰者の出合ひでは、ありませぬか。

つまり彼等二人の良心は萎微してゐるので、人間としての活力が消沈し、人としての努力的精神が欠乏してゐるのである、世の中には彼等の如き怠惰者が群山あります、彼の貧困と云ひ、失意と云ひ、自殺と云ひ厭世と云ひ、皆この勤勉と努力とより遠ざけられたる怠惰ものゝ運命であります、彼の、怠惰の人の心は磨臼の如し、小麦を之が中に容るゝときは、之を粉碎して、麥粉となすも、何物をも容れざるに於ては、磨臼を磨いて、終に之を消滅せしむるに至るべし。

との西哲の金言は、確かに、怠惰ものゝ運命を指的いたしたるものであります。

### 一三三 三十棒 其三

一日罨曇が多く御弟子を随へて外へ出られると途に三人の醉漢のんかんが居りました、甲の醉漢は罨曇の御姿を見るやいなや、忽ち叢の中に隠れました、乙の醉漢は途の真中に、大あくぐらで、とりとめのない、ことを喋り立て、或は笑ひ或は、「酒呑めばいつも心が春めきて借金取も鶯の聲と云ふやうな、調子で前後不覺の体でありました、次に丙の一人は、大聲を擧げて云く、我は、敢て盗んで呑んだ酒ではあるまいし、誰れに、遠慮するところがあるものかそんな、肩身の狭い酒は呑まねいぞと、通りかゝる人に向つて悪口雑言を述べてありました、これを御覽になつて罨曇世尊は多くの御弟子に向ひ申さるゝには、乙丙の二人は酒を呑むにあらざして、酒に呑まるゝものであつて自己の存在を忘却したもので無慚恥のものであるが甲の醉漢こそ、慚恥の心あるものであると即座に慚恥心の修養すべきことを示されたのである。



彼等三人は酒の上のことである。古人も酒のことを氣違水とまで云ふた位であるから酒の上のことなら、多少酌量もしやうが、世の中には、名譽榮達、權勢爵位と云ふやうな、一寸風の變つた酒に酔ひまして、己れが踐むべき道も忘れて、遂に公衆の面前で恥をかく様なことがあります。

支那に海門禪師と云ふ高僧がありました。曾つて天童山に長老の職を勤めて居られたときに、會下に元首座と云ふ僧がありました。この僧は既に得法悟道の人であつて、その日々の行爲も總て海門長老よりも、遙か勝れて居つたのである。或る夜、方丈(海門禪師の居間)に參じて、焼香禮拜して、請ひ求めて云く、某甲に後堂長老を許せと、申されました。時に禪師落涙して云はるには、首座長老を所望すること、大なる錯なり、汝ち悟道せること我よりも越へたり、然るに首座を望むと云ふは、是れ昇進の爲め、許すことは前堂の職であれ、乃至、長老の職であれ、容易なれど、汝ちの心操こそ、實に卑劣なれ、修養に於ては、天童山第一位を占むる、貴僧にして、このことあるは、餘の學僧の心操、推し計るべしと、流涕悲泣せられたとあります。

これ此僧は、己れの人格の那點にあるかを忘れたのであります。世の中には、かつを節や、菓子箱を餌食として、學位號や、榮譽、利達の職を得んとするものは、皆この僧と同一轍で、慚恥の心を忘却する、愚鈍の輩であります。世尊の訓誡にも、慚恥の服は諸の莊嚴に於て最も第一と爲す、慚は鐵鉤の如く、能く人の非法を制すと、あります。人倫背徳の非法を防ぐ最大良法は、身に慚愧の服を着することである。是れ禪の鉗鎚であります。

一四 三十棒 其四

ある愚かものがありました。或るとき、嫁の郷里へ、要用にて參りました。元來愚かものであることは、嫁自身も知つて居ることであるから、里へ行くに臨んで、いろ／＼と注意を與へてやりました。而して、愚かものが嫁の郷里へ着きますと、里方では、我が娘の聲が來たと云ふので、非常にもてなし、先づ、早々、入浴を進めたから、早速、湯殿へ參り、桶に入らんとするに、湯が非常に熱つたつた、時にも聲先生、大に考へこんで、女中に云つて



曰く、漬大根を一本持ち参れと、繰り返し〜云へるより、女中は、一本の漬大根を與へけるに、お聲先生、大に喜び得意顔をなし、件んの漬大根にて風呂桶の内側を三四回、も廻はしてポリ〜と残らず、食つてしまいました、案ずるにこれは、食後の茶碗のお茶が熱ついときに香のもので二三度廻して呑むと、湯が冷めると云ふことを考へて、茶碗を風呂桶と同一視したものであらふ、而して、お聲先生のお湯を上るや、珍座敷、に案内をいたされました、その内に、お茶や立派なお茶菓子がたから、とりあへず、お茶菓子を一つ食べてみたところが、中々、珍らしくて味がよい、お聲先生、熟ら〜考ふらく、このお茶菓子の名は何んと云ふらんと、名を聞かうか、よそうか思へば、出發のとき嫁の教訓にも知らざるは知らずとせよと誠められた、イヤ知らざるものは聞くがよいと、主人に向つて、尋ねますると、主人は、腹の中では滑稽で堪へられませんが、顔に出すのも悪いから、平然として答へて云ふには、これは、お團子でございます、粗末ながら澤山めしあがつて下さいと、叮嚀のもてなしに、お聲先生、大に喜び、ア、團子とはこんな、

味の好いものか、どれ〜家に歸つたら嫁に造らして、食べやう、さてよ、團子と云ふ名前を忘れてはならぬから、と、獨り肯づき、懐中より紙を取り出だし、書きつけんとなせしも、途に落とせしものか、一向紙の見當らざるより、よし、途々、口に繰り返し行かば忘るゝことなしと、早速、所要を了して、嫁の里を立ち出て、途中、團子々々々、と云ひ續づけ來り、我が住家より、約二三町ばかり隔たりたる小川のところまで、やつて來た、所が、その川を飛び越へる柏子に、「ドッコイシヨ」と掛け聲をかけた、先生、團子々々と云ふことを早や忘れて、「ドッコイシヨ」「ドッコイシヨ」と口に云ひ續づけ、漸く自分の家に着いた、歸るや直ちに、「ドッコイシヨ」を貴様の里で御馳走になつて來たらか、今晚すぐ造くつて呉れと、申しますから、嫁は何事かと大に驚きいろ〜と聞き正だせど、「ドッコイシヨ」「ドッコイシヨ」と云つて、聞き入れません、嫁は夫の云ふことの余りに滑稽なので、笑はずにはいられない、夫は嫁のとりに上げざるを憤り遂に鐵棒を振り廻はし、頭に二三箇へコミを入れました、いたいのいたくないではない、嫁の頭には忽ちに二三のゴブが出來ました、



時に嫁は笑ひどころではない、頭を手にて押へ、なんだチ、あなたは、團子の様なコブを造つてと、哭きだした、スルト、夫は、ア、其コブの様な團子よと云つたとのことであります

何んと言ふ、愚と云ふも随分愚かな奴ではありませぬか

世の中には、此お聲さんのやうな輩が實に多いのである、禰は、かゝる、お聲さんの持つたる鐵の棒を奪ひ取り、一棒三十棒のもとに、團子の邪魔物を奪いと、着味を離れた、團子の眞面目に、鍊へ込むものである、

### 一五 三十棒 其五

このごろある學者が、細君を迎つた、この細君は先頃某女學校を出身した、ほかくてあるから、その家政も、學校仕込と云ふ始末だから、主人も、聊か得意であつた主人は或る日曜日を下して、友人三四輩を招きて鮎を馳走するとの案内を發した、時に友人達は新妻君のお手料理ときては、近頃以つて一層の上鹽梅ならんと打喜び案内の時刻をたがへず、出掛かけた、ところが、

時は正に十二時を報ずるも、まだお鮎がでない、尙一時を報じても、まだ出ない、客達も余り遅いので、腹は段々空になつてくる様子、主人もこれを見兼ねて、もう準備は出来つらんと思ひお勝手へ到りて見れば、新妻君のお姿が一向に見えず、只女中一人、酢瓶を手にして、ぼんやりとして立つてあるのみであつた、とりあへず、新細君の行くへを聞けば、お二階にこのこと故に早速二階に上つて見ますと、いやはや、引き越し間ぎはの取りちらかすと云ふ調子で、箆笥の引き出しは、三つも四つも、引きだしてあり書籍と云つたら、皆取り出し甚だ混雜を極め、又細君の顔はアセ一杯であつた、主人は、大に怒り、その様なことはあつてもよいではないか、もうお鮎が出来る筈であるのに、とうしたのかと、細君の云く、ハ、實にはや何んとも申し譯がありませぬ、お鮎を拵らへる分量加減を記して、おいた、ハ、ハ、ブツクが見當りませぬので、大に氣を按んで居るので、ありますと答へたので、主人も、今と云ふて間にはぬから、近所の鮎屋へ注文しろと命して、漸やく、二時半頃に岡持が勝手へ到着したとのことである、まさか、買つたとも、云



へぬから、甚だ遅くてすみませんと、白らそきつて居つたとのことである。と、ア細君も細君だ、客も客だ、もし著者にして、客の一人であつたならば、立地に三十棒を喫せしめるであつた、禪はそんな、ノートブックが見付からなければ、お館が出さぬなどと、云ふ、無頭腦のことは大禁物である、もし又三十棒を喫せしむることができなければ、早々家に歸へつてしまつてあつた、そのかみ、南泉が大勢の參禪僧に向つて示して云く、我れ今まこの猫兒を斬却して兩段となす、衆中もし云ひうる底あらば、斬却せず、云ひ得ずんば、斬却すと、時に衆中に趙州と云へるものあり、頭に草履を載いて、そこを立ち退いたとある、これこの趙州の草鞋を載いて出てたのは、既に南泉の問題に預らぬと云ふ消息を示したのである、もしその問題に預らざれば、云ひ得るの云ひ得ざるのと云ふ、妄想はいらぬと云ふので、却て、南泉を、置き去りにしたと云ふ見識である、客にして、此趙州の境界に住したら、一層禪味を帯んで、佳境に入つたであらう、禪は須らく、學問の臭みのとれた、ノート、ブックを離れた、當意即妙の鮎を上鹽梅とするのである、禪の金言に云く、鑑機前にあり

と、又禪苑清規に云く、  
須らく、道心を運らして時に随つて、改變し、大衆を以て、受用し、安樂ならしむべし。

とこれ禪の料理に對する警訓である、されは館に限らず、總べて失敗のないのがあたりまへのことなれど、たとへ、失敗したにしても、臨機應變の妙術を振るつて、洒々落々のところが、なくてはならぬ、

或る日太閤殿が、云はるゝには、千利休を始め、出入の茶人が代りく、お茶を煎て、呉れるがドーも、湯加減が熱つかたり、冷かつたりして上加減と云ふのは少ないもので、獨り會呂利新左衛門の點てた茶のみは、上湯加減である、と御賞讃になりました、時にある人これを怪みて別室にこれを聞きますると、會呂利の云く、これは、會呂利流の茶道の極意であるから、多言はなりませぬぞと、人曰く、并は勿論、茶道の秘奥とあれば決して多言は申さじと、時に會呂利の曰くそれは餘の儀にては御座らぬ、他人の點前に於ては時々湯加減のぬるしあつしがあつて、その程合が分らないから、拙者の流ては、そ



の欠點を避くる爲め、前以つて、熱てた、お茶を一す一口飲み、熱ければ水を入れぬるれば湯を増して、我が口に丁度適合したところを定め、飲み口と、己れの口を拭ひ、知らぬ顔の半的で、いと恭しく殿下のお前へさし出すので、これ會呂利流の點方であると教へました。

と、著者の知る女中で、誰れのお料理を致すのでも、吃度、箸の先で、その味を見る癖がありました。これ又會呂利流の料理法であるが、敢てこれらを摸擬する必要もないが、先きの新細君一流の聲は、宜しくノートブックを離れて日常に實修する分がなくてはならぬ。

### 一六 三十棒 其六

俚諺にも、○○氣とうぬぼれの無いものは無いと云ふてある通り、何んでも自分はい人は悪いと云ふ了見は、誰しも持つて居ることであるが、これは實に善くないことである、一家の不和を來すも、兄弟、相争ふのも、朋友間の不信を來すも、皆己れの我見を本として、あるからのことである。

去る家の嫁と姑とが、一日家の軒下に掛かつて居る風鈴の鳴音に就いて、議論が始まつた嫁の曰く、あの風鈴はチリン／＼と鳴ると云へば、姑の曰く否とよ、チリリン／＼と云つて鳴ると、各々その己見を主張して、約く半日も及よんだ、ところが、嫁の曰く、然らば、その正邪を定める爲めには檀那寺の和尚さんに頼むことにしやうてはないかと相談を持ち出すと、姑は、日頃特に懇意にしてあることでもあれば、早速これを承諾をいたした、嫁は直ちにその赴きを和尚に何日何時とその裁判を願ひおき、因んで二十錢の銀貨を紙にヒチリて和尚に差し出し、就ては妾も、あの老朽の姑に敗を取るは残念なれば、裁判の結果妾を勝たして頂きたいと願ふて歸りました、その内に又程なく、姑和尚の處に参りまして、又二十錢の銀貨を紙に包みまして、和尚の前に差し出して曰く、願くは、明日の裁判に於いて私に勝利を與へて下され、私もあの嫁の野郎に敗を取るは残念なれば、是非その邊のところを宜敷願ひますと依頼し置き、家に歸り、そしらぬ顔をして居つた、而して、その約束の日に二人諸共に和尚の前に出てその勝敗の宣告を俟つて居つた、程



なく和尚奥より出て来りて、兩人の前に坐して、暫らく考へ込んだ、それはその筈で兩人より多少の賂が取つてあれば、滅多な口はさかれないと云ふ様子であつたが、漸やく口を開いて云く、

あ、件んの金を懐より取り出し、ああ、拙僧は、お婆さんに二十錢而してお嫁さんに二十錢、都合四十錢、と云いつ、件の金を手の中て振つて、風鈴の音はチリン／＼でなし、チリリンでなし、チヨ、ロリン、だと云つたとの事でありませす、

この和尚の如才の無いことは別として、僅かこんな、風鈴の音位で親子相争ふなどは實に面目のないことではありませんか、

昔、伽耶舍多尊者、殿の銅鈴の風に吹かれて、鳴るその音を聞いて、師の僧伽耶多和尚に問ふて曰く、鈴鳴るか、風鳴るか、師曰く風に非らず、鈴に非らず、汝が心なるのみと答へられたとある

以上の親子兩人は此消息を實參實究したらよからう、尙天童淨祖の風鈴の頰に渾身是口掛虚空、不管東西南北風、一等爲渠談般若、滴丁東丁滴東丁、

とこの意を會得したら、風鈴の音も能く聞き分けられることであらう、

### 一七 殺人劔活人刀 其一

ふいふかき、人の心と、ふる雪は。  
つもるにつけて、道をわするい。

と、これは普通一般の人の欲するところてありますが、實にこの慾張根性ほど、人の價值を下落せしめ、それが爲め遂に己れの位置を失ひ、恰かも人生になきも同然の姿となるものである

或る處に金を蓄めるお婆さんがありまして、今にも、棺桶の中に入りそふな分際をも顧みず、ろくに食べるものをも食はず、飲むものも飲まず、衣るものも着ず、人に乞食と云はれやうが、けちんぼうと云はれやうがソナナことは無頓着で、平氣の平左で、唯金さへ蓄めればよいと云ふ、やり方であつたところが、塵も積れば山となるの道理でありまして、何時となく、金が澤山に出来た、婆さん得意になつて大に喜び、毎日三疊敷の二階で、一圓紙幣を



一枚づゝ出しては列べ遂に座敷一面に列べ、ニコくして、自分には嬉しく  
てくゝてならぬ、實にはや大喜びで、遂に我身のことを忘れまして、さかさ  
まに、二階から落ちて足の骨を折り、それが元で死んでしまいました、との  
ことであります

と、これ所謂、世の中の躰ひべき道を忘れて、利己主義の一邊に傾き、それが  
爲め遂に一命を失つたものである  
これ

世を渡る、道はと問は、とにかくに、

よくの淺瀬を、ゆけとこたえん

と、云ふ少慾の理に暗さが爲めである、彼の行賊上人も、

法の身は、たらひてすませ、墨衣

ものほし竿の、慾にかゝるな、

と示されたが、これ實に這般の強慾婆さんへの鉗鎚であつて禪は、かゝる婆さ  
んには殺人刃を分附するのである

又、

そのかみ、成瀬準人正成と云へる人の城下に米屋八郎兵衛と云ふものがあり  
ました、これまた、前の強慾婆さんに劣らないところの慾張であつて、日々  
の米を賣りまするに遣拵と取拵との二つを造り置きまして、お客にお米を賣  
るときには、小さい拵で計り、己れが米を買ひ込むときには、大きな拵の方  
で計つて買ひ取ると云ふ始末で大層お金を儲けました、ところが、此事を領  
主成瀬正成が聞き込み、大に立腹をいたしました、彼を罰することゝ定まし  
たが、マテ此處が一番考へところであると一考し、彼れを、徒らに罪して、  
不具にするより積極的に一つその罪を罰してやらうと決心をしまして、彼に  
云つて曰く、其方は今迄人に己れが強慾を縦まゝにした處刑として、今迄の拵  
を用ひて宜しいが、併しその用方に於いて以前と反對に、米を買ひ込むとき  
には小さい拵で買ひ、賣るときには大きな拵で賣れと云ふこの命令が彼への  
罰でありました、彼れも是非なく其命に伏したところが、その日よりお客が來  
るの來ないのではない、山をなす程であつた、それが爲め、以前強慾であつ



たときより利益が倍にも及よんだとのことである。

準人正成の強慾八郎兵衛に對する三十棒は、人を殺すの棒でなく、人を活かすところの棒頭である、この鉗鎚こそ禪の教ゆるところの殺人劔上に活人刀を弄するとはこのことである。

## 一八 殺人劔活人刀 其二

よく修養の出来たところの人は、殺人劔の上に、活人刀を弄し、活人刀の上に殺人劔を自由に使ひうるのであるが、若し修養の不充分なる人、或は、お手前免許の味噌臭ひ先生は、時々此劔刃の毒手にかゝるのである。

鐵牛禪師仙臺の大年寺在住の當時、會々僧あり鐵牛禪師に向ひ問ふて曰く、蚊子鐵牛を咬むとき如何、これは、鐵牛禪師の峻峻なる一寸窺ひのつかぬ程の鐵牛をば、今小さい蚊子が一匹舞つてきて、咬みつぶしたときには如何と云ふ僧の見識である、時に鐵牛禪師の曰く、藏身の狀を爲された、これは、ア、オツカナイ、恐ろしいことじやと云はれた、この一言は、ウツカリ聞く

ことのならぬところである鐵牛藏身の狀に於いては、殺人劔と活人刀の殺活自在の赴きがあるのである、僧時に取り敢へず、吞却し了れり、と答へた、と云ふのは鐵牛禪師あなたは恐しやと、御つしやるが、蚊子はモウ鐵牛を吞却して、丸呑みに吞んでしまいましたと、答へられた、時に鐵牛禪師の曰く、何んとしてか此一棒を餘し得たると熱棒を喫せしめた、(淨山打つた)、此僧此時何んとか切り抜けなければ、ならぬのであるが、忽ち棒下に絶息してしまつた、是れ吞却し了れりと云ふた、僧の見識はよいが、只殺人劔の受用のみをしつた向上の死漢と云ふべきである、活人刀の一棒を残したものだから、活人刀の受用を忘却して遂に自からが殺人劔一方向の檐板漢に落ち入つたのである、時に絶後の老婆心を以つて鐵牛禪師左の引導を與へられた、

紅葉落時山寂々、  
蘆花深處月團々、  
提起向上那一刀、  
虚空碎作七八片、

と、吾人は、この僧の如く、唯殺人劔の一方のみを知つただけではいかぬ、即ち此僧は、充分鐵牛を吞却し盡すことが出来なかつた、これを生理的に考ふれ



ば、吾人が物を食べても充分に呑み込んで、更らにこれを能く消化させなくて  
 はならぬ、所謂その血液が、身体に行き渡り、舊細胞を取り出しそこに新しい  
 細胞を置いてこなくては身体の健康を來すことは出来ぬ、今此の僧もそれと同様  
 で、鐵牛を吞却したら充分消化して新細胞を置いて舊細胞を持ち歸るところま  
 で吞却すればよかつたのに、途中で、中毒にかゝるとは實に氣の毒であつた、  
 もし此僧向上更に向上の那一刀を使ひ得たならば、互に刃と刃とがカチ／＼と  
 相當り、箭鋒相逢よと云ふ有様で、能禮所禮性空寂感應同交難思議であつたら  
 うに、甚だ遺憾であります。

ところが之れに反して、更らに修養が出来て居ると中々面白い、  
 禪門の英傑大智禪師、壯年の時代、肥後の大慈寺の御開山である寒巖禪師に  
 侍して居られたときのことである、由來此寺の門前には商船が常に往來して  
 居る、或るとき、禪師が往來する船を指して大智に問ふて云ふのに、「汝這裡  
 に在りて行船を停め得てんや」とこれは大智の前、そこに居て彼の船を止ど  
 めることが出来るかとの問であります、つまり、日々吾々の心中には是非善

惡迷悟、有無得失邪正の種々雑多なものが常に往來して居るが即今これを止  
 どめることが出来るか、換言すれば、大解脱を得ることが出来るかとの問で  
 ある、時に大智和尚は何んとも云はず前の障子をびしやりと閉めた、と云ふ  
 ものは、サア是れて出沒去來する、迷よいだの悟りだの、善いの惡いの、そ  
 んなことや、こんなことも一切見へなくなつたから御安心あれとのことであ  
 る、時に禪師の曰く「尙ほ手脚を勞すること有り」と仰せられた、つまり成  
 程さ前のその手段は一寸よいが、態々その手を弄すると云ふことは、抑々小  
 刀細工とても云ふべき間に合せのやりかただ、更に向上の妙手段があるかと  
 の一着である、時に大智和尚、兩眼をピタリと閉じられた、これは元より手  
 足の音沙汰ではない、本來この境界だとの、これが當意即妙の答である、  
 と、此二人の出会いに於いては、元より大智和尚壯年のときのことであるから、  
 充分とは云へないが、兎に角心生せざれば萬法咎なしと云ふ見處に於いては、  
 順逆縱横にその殺人劔活人刀を弄し、即處にその毒手に觸れなかつたと云ふべ  
 きである、若し大智和尚にしてこの見處の修養がなかつたら、たとへ千言萬語



を費すとも、殺人劔の切ッ先に觸れたであらう、

### 一九 心量の大小

諸士は以上に於て、或は三十棒を喫し、或は殺人劔、活人刀のもとに、精神を鍛錬し來れるが、余り武器の銳利なる爲めに、鑄造せられたる精神は、燒物の巾着の如く伸縮不自由であつてはならぬ、寶鏡三昧にも、大には無間に入り細には方所を絶す、

と、道破せられてある如く、禪的心量の修養は、こゝに及ばなくてはなりません、由來禪にては、心量の大きなることを貴びます、同時に小心をも貴びます、元より大と云ひ小と云ふ、大小比較の大小にあらずして、寶鏡三昧の訓言の如く、數量に墮せざる大小であれば、大のときは徹底大の心量であり、小のときは、徹底小の心量であらねばなりません、

昔し儒者と經者と禪者と三人集りまして、大と小に就いて各その心量と比較したことがあります、先づ小の心量に就いて儒者の曰く、

蟻の子の、其子の孫に、くらあいて、  
それに乗る子は、小さかるらん、

と詠じますと、次に經者が、  
芥子粒の、中に七堂、建てならべ、  
住み居る住持は、小さかるらん、

次に、禪者の云く  
ぶよの目の、こぼす涙の浮島を、  
千千に碎きし、國ぞ小さき、

と詠じたとあります、次に大の心量に就いて、儒者云く、  
武藏野に、蔓る程の、梅が枝に、  
天地に響く、鶯の聲、

とやらかすと經者の云くそれでは心量がまだ小さい、  
須彌山に、腰打掛けて、大空を、  
笠にかぶれど、耳も隠れず、



と、非常に得意でありました、スルト、禪者が、

三界を、丸めてグツト、呑む時は、

須彌も鐵圍も、喉にさはらず、

と、詠じた、こゝに、二人の儒者と經者とは顔色を失つたとある、時に鞍馬

山の天狗が、ノコノコ出てきて、

三界を、丸めてグツト、呑むならば、

鞍馬の天狗、なぜにのこした、

と、驚となり付けました、時に禪者呵々大笑して云く、

我が腹で、何をブツク、ぬかすのだ、

お湯がほしいか、お茶がほしいか、

と、やらかすと、この天狗先生も亦顔色は

なかつたとのことである、

と、こゝが禪者の禪者たるところである、

般若多羅尊者あるとき、達摩大師に問ふて曰く、諸物の中に於いて何物か最

大なると大師の如く、法性最大なり、

と、答へられたが、此法性大の心量であることを忘れてはならぬ、併し吾人は

又、放膽、攢量として大の一方に傾いてはならぬ、如何なる些事にも注意を拂

ふことを忘れてはならぬ、澤菴禪師示して云く、

蚤の飛ぶにも心を付くべし、大道の端なり、大道をあきらむるに便となれり、

牛馬は其性大なり、蚤は其性小なり、然れども蚤の小と、牛馬の大と、皆大道

の端なり、大小の道を見ることなかれ、大小の差なし、譬へば黄金を以つて、

蚤を鑄る如く、又牛馬獅子等之を鑄るが如し、蚤と牛馬獅子と皆黄金なり造

化の上に長短大小あり各荷の葉の圓き、松の葉の細き、なにをか棄てなにを

か取らん、物各一大極あるなり、

とありまして、性そのもの、上には、大小はない吾人の心量も亦性の上にあら

ねばならぬ、

而して禪に於ては常にこの心量を呼ぶに小心と云はず大心と云ふのであるが、若

し以上の意を充分に了解しないならば、その心量を誤ることである、元古佛、



この大心の意を示して云く、

大心とは其心を大山にし、其心を大海にして偏無く、黨無き心なり、雨を提げて、軽と爲さず、釣扛て重とすべからず、春聲に引かされて春澤に遊ぶ、秋色を見ると雖ども、更に秋心なく、四運を一景に競ひ、鉢雨を一目に観る、

と、これ心量の擴大にして且つ不偏不黨の大心である、一休の所謂、

風はいき、雲は心に、日は眼、

海山かけて、我身なりけり、

と又た

心とは、いかなる物、をいふやらん

目には見えねど、天地一ばい

と、吾人はこの心を我が心としなくてはならぬ、

## 二〇 寛裕の精神

又吾人の心量の修養は、單に分量的の修養を意味したるものではないのである、

されば、心量の擴大、即ち大心の修養は吾人の襟懷を雅量にし寛裕の精神を養ふこととあります、

彼の南北戦争に於て北軍の總指揮官、にして、後大統領の椅子を占めたる、グラント將軍、一日家族と共に旅行せんものと、一列車の一室を借り受けたこれ米國にては、車内にて勝手に喫煙するを禁じ、若し自由に喫煙せんと欲するものは、特に一室を借り受くる規定なれば、煙草ずきなる將軍が旅行には、一室の借切は常によぎなくさるゝところである而して將軍は、總ての準備を了し、己れの乗室に陣をかまへけるに、同列車の乗客たる數名の婦人は、ドカ／＼入り來りて座を占めけるに、將軍は、平然として、その爲すがまゝに任せ、己れは、巻煙草をボカ／＼、吹かし居けるに、煙りは室内に充ちて、殆んどひせんばかりなれば、婦人の一人は將軍の前に進み來り、て曰く、請ふ喫煙を止めよと、要求をなしたり、然るに將軍は敢てその要求に對して、反抗する景色もなく、その請に應じて喫みぐさしの煙草をば、窓外に投げすて、而して己れの手かばんより小冊子を出して餘念なく一頁を讀みけるにや、



驛鈴は發車を報し、驛夫は室内の檢閲をせんもの入り来るや、驛夫は、彼等數輩の婦人を顧視し此室は將軍の占有室なることを報じ直ちに退却を命ぜしかば、彼等の赤面は一方ならず將軍に向つてその粗忽を感謝し、早々に飛び出てたりと云ふ

何んと米國の運命を双肩に擔へる將軍の精神の寬量なる實に模範とすべきである、吾人が大心の修養亦ここに至らねばならぬ、併し此に注意を要するは寛裕の精神は往々、ズボラに陥り易うして爲めに、他に同化せらるゝの嫌がある、されば吾人はこゝに一層占めくゝりを付け自信力を養ひ、己れの主義を主義とするの權威を保たねばなりませぬ

## 二一 自信力の必要

禪に於てはこの自信力を養ふことは、最も必要である、吾人が實際事に臨んで、その成功すると失敗するとは、この自信力を有すると否とによるものである、されば、この自信力なきものは、兎角外界の爲めに誘導されて、人が是と云へ

ば是となり、非と、云へば、非と信じ、外界の導くがまゝに雷同附加して、遂に己れの目的も理想も没却して、その爲すところを失ふに至るものである、或る所に老人あり一頭の驢馬を賣りて、一と働らさせんものと、己れの子供を従てへ市都に牽き行きけるに途に一人の男ありこれを見て告げて云く、驢馬の背を空らにして、親子徒歩するは、何んと愚かなる所爲ならずやと、之れを聞きたる老人は、之れも一理ありとて、子供を驢馬に乗せ己れ驢馬に沿ふて歩行しけるに、又一人の男來りこの様を見て告げて曰く、年老たるものを歩ませ、少きもの、乗れるば、何んと親不幸、不倫の沙汰ならずやと、老人は其云ふところ亦理ありと信じ、小供を卸ろし己れ之れに乗り行きけるに次に來れる男の云く、未だ年少き小兒に牽かせ、己れ、安閑と乗りすますとは、親として餘り無慈悲なる所爲にあらざるか若し二人共に乗らば、相互の安息にあらずやと、老人はこれ又一理あることと信じ、子供を己れの後に乗らしめけるに、次に來れる男之れを眺め、驢馬は元來、弱きものなり、之れに二人同乗するとは、動物虐待も亦甚しからずや、驢馬が二人を乗する苦痛を思



ひやるの情あらば、二人にて驢馬を背負へるの却て容易なるべしと、これを聞きたる老人は、これ亦た、一理あることなりと、信じ、遂に二人は下馬し繩にて驢馬の四足を固く縛りこれに太き六尺棒を貫き親子二人して擔きたるに、驢馬はその苦痛に堪へず、苦悶やる方なく、遂に縛せられたる繩をかみ切りて、傍なる深き谷川に轉ひ落ち憐れにも悲命を上げて絶命しければ、これを見たる老人は、嘆じて云く、我れは多くの人の云ふ所を信じ、多くの人を満足せしむ可く事こゝに及ぶ、嗚呼遂に我財産たる驢馬を失ひたりと、涙を落しつゝ家に歸りけるとかや、

何んと愚なる所爲てはないか、これ彼れが自信力を有せず、無暗に他の云ふところに雷同附加したるによる、吾人が修養は、須からく、自己の本位を守り、自己を尊重し、その爲すところ我則を越へざるにあり、是れ即ち禪の修養であります、

## 二二 主義を主義とせよ

また禪に於ては、此自信力を有する人は亦、己れの主義を主義とするの人であらねばならぬ即ち道徳家は、徳義をその主義とし、宗教家は、慈愛を以つて衆生に臨み、哲學者は、眞理を以てその主義となし、法律家は正義を以つてその主義となし、各々その自己の主義を嚴守して如何なる、艱難に遇ふとも、如何なる恥辱、如何なる攻撃、如何なる輕侮に、會するも、須らくこれらと戦ひ、驀直に、截断して、その主義を主義たらしむるこそ、これ禪の修養である、

彼の新しき時代の新しき勳爵士と呼ばれたる、北米自由郷の無冠の女皇フランセスウキラルドは元より彼れが身には、高き名譽を有し、貴き位置を有し、千金の年俸を以つて女子大學の總長に懇招せられたるに、彼れは、有ゆる艱難と、有ゆる世評と、輕侮とに奮戦して、過度の勤勞と窮困の中に我が身を献くるこそ我が主義なりと絶叫し、當時、まだ、何の勢力なく、名譽なく、位置なき極めて微々たる婦人矯風會の主任者となり彼れは、

「吾れは囊中五錢の馬車代なきも吾はシカゴの町を有す」

と絶叫し、此大抱負のもとに、家庭及び社界の改革運動に専心し、二十有餘



年間献身的に任侠博愛を以つて主義として遂に米國講壇のピーチャー、ムーアの諸將と肩を双ふる女丈夫となつた、

彼れは一代を自己の主義を以つて主義としたのである、又

ニューヨーク某銀行頭取は、或る日曜日とその某事務員に向つて臨時の仕事  
を命じけるに某事務員は日曜に務に就くは自己の主義に相反すと答へけるに、  
頭取は免職を以つて是れを脅かしたるも某の曰く、主義は免職よりも重しと主  
張したりしとか是れが爲め遂に行掛り上、免職せしめられたるか、日ならず  
して頭取の知人にして銀行を創立するものありて正直なる金銭出納係の周旋  
を請ひければ、頭取は先に解雇せし某事務員を推舉し、某は正直に於ては天  
地と共にする底のものなりと語りければ某知人は喜びてこれを採用したりと  
のことである、

何んと正直なる主義の人ではありませぬか、禪の修養は須らく己れの主義を主  
義とする底のものでなければならぬ、

### 二三 成功禪

世の中では成功々々と云ふが、全体成功とは如何なる意味であらうか、一般のも  
のは云ふ、社會の大勢を觀破して、その機に乗じて、社會に相當の地位を占め  
た豪い人を云ふのであると思つて居る、而して一種の地位を得ると、その地位、  
その境遇が自らその人を教導して相當の重みをつけることになる、人これを以  
つて彼れは大成功の人であると叫ぶのである、これは離れもそう思つて居るら  
しい、サテ成効と云ふものは斯様なものであらうか、若し果して然りとしたなら  
ば、著者は成効とは左程貴いものとは思れないと思ふ、何んとなれば、唯、  
時機に乗じて位置を占めた豪い人と云ふことは、成程その社會にはいくらか  
豪いかは知らぬが、それは、その人物それ自らは一寸とも豪いことはない、の  
う、尙且つ、豪くなくともその時機に乗じ時代の問題の中心に乗り出すことが  
出来るからである、

現今の有様を見ると大抵の人は一攫千金の山に當つたとか、一夜に、社會の舞



豪に飛び出したと云ふことを成功と考へてゐるがこれは大に誤りと云ふべきである、

禪に於いて斯かる成功を以つて眞の成功とは云はぬのであつて、禪の眼から見た成功は、大臣になるのも成功、或は澤山な金を儲けるのも、皆成功と云はぬではない、が、時代に地位を占めた豪い人と云ふよりも、豪い地位を得た人物その人の價值如何にあるのである、されば地位の遇不遇は自然の境遇から生ずることなれば、たとへ身は大臣の地位になくとも、又は時代の風雲見でなくとも、たとへ先祖傳來の財産を失ひ去らるゝも、常に信用と勉勵と正直との正しさ大道を踏み行くものが所謂眞の成功であるのである、如何に百千萬圓の財産を親より受けとるとも、

寝たり起きた轉たり、傘まくらに茶碗酒、

と云ふ、のんべんぐらりんでは、どうして成効と云へやうか、吾等は常に勇猛精進して、道の爲めに道を行ふ人その人が成功者であると思ひます、されば勞働者であらうが、大工であらうが、商人であらうが、百姓であらうか、唯その

踐むべき道を踐み精進勇猛して得たところの結果がこれ成功であります、即ち道元禪師も

行の招くところは證なり、

と示されたところの賜物をば眞の成功と云ふのである、佛陀も、遺訓に、精進すべきを示して曰く

汝等比丘、若し勤め精進すれば事として難きものなし、是の故に、汝等當に勤め精進すべし、譬へば少水も常に流るゝときは能く石を穿つが如し、

と、されば吾等各その道に安んじて精進すべきを忘れてはならぬ、

白隠の、片手の聲を、聞くよりも

雙手たいて、商ひをしる

と白隠禪師の某商人に答へられたも、

又た

世の中は、何んのへちまと、おもへども

ぶらりとばかり、いてもをられず



と、皆これ其天分を重んじて、精進すべき成功の秘奥を示した福音であるのである、要するに成功禪とは、所謂實踐躬行の人之れを稱して成功の人と云ふことができてゐると思ふのである、

## 二四 實踐躬行

大慈寰中禪師の云く、

一丈を説得するよりは、一尺を行取するに如かず、一尺を説得するよりは、一寸を行取するに如かず、

と、禪は理論を説くものにあらずして、吾々が日々踐むべき道を實踐するものが禪である、威儀是れ佛法と申しまして、朝より晩に至るまで、晩より朝に至るまで、すること爲すこと、茶裡にも飯裡にも、寝る上起る上が悉く禪であれば、大事より小事に至るまで、滞りなく、行ふのが禪である、されば元古佛は、日々の生命を等閑にせず、私に費さいらんと行持するなり、と、又曰く、

我等が行持によりて、諸佛の行持見成し、諸佛の大道通達するなり然れば、即ち一日の行持是れ諸佛の種子なり諸佛の行持なり、と、あるは、これ實行の重んずべく、その徳の廣大なることを示されたものである、

或る豪商の主人が一人の番頭を雇はんものと、諸種の新聞に廣告を致しますると、その募集に應じて二三十人も参りました、主人は應募人の來るや、直ちにその中から一人の青年を抜き出して番頭に推薦を致しました、時に傍らに一人の知友ありて、曰く、斯かる多くの希望あるにもかゝらず何等の表準もなくして、一人を勝手に撰ぶと云ふことは、自由も甚だしいてはないか、抽籤にでも致されては如何かと注意を致しますと、主人の曰く、否とよ、勝手に選抜したるにあらで、先づ此青年が入り來るや、靴の塵を拭ひ且つ靜とやかに戸を閉したり、是れ秩序と清潔と實踐とを示すものなり、又その青年の席に就かんとするや計らずも他より客の來れるに際して己れの席を譲りたり、是れ親切にして且つ注意の周到を示せるもの、又室に入るや、直ちに脱朝し、



予に對する應答敏活にして明快、且つその態度また周到なり、これ禮節を表するもの、予は又彼等の入り來たるに際して入口に一冊の書籍を置きたるに衆等は或は蹴り、或は踏み、異種異様の粗暴をなせしが、彼れは、これを拾ひて机上に載せたり、これ注意心に富めるを示せるもの、また、彼等の戸口に入るに當り各々先きを争ひけるに彼れは、衆人の入るを待つて、徐ろに入り來る、これ謙讓を表す、又彼等は衣服汚れ、頭髮に塵を戴き、爪の間には垢の一抔存するを見る、然るに彼れは、是等一切に注意の周到なるは、物事を整理し得るの力量あるを見得せり、以上の實踐躬行は正に番頭に、選拔すべき表準である、と申したとのことである、

と、斯の如く、實踐躬行の人こそ、禪に云ふところの那人であります、

## 二五 一日禪

上叙の如く日々の生命を等閑にせず、私に費さざるもの、これ禪の實踐躬行の人なれば、吾人はこの生命の取扱ひ、即ち一日禪の實行を怠りてはならぬ、禪

の教主釋曇は、その一日禪を説示して云く、

眠り始めて寤むる時は、當さに衆生と共に、一切の知覺を得て、周く明らかに、十方を見るを得むことを願ふべし、

と、又次に

衣を整ふる時は、當さに衆生と共に善根の衣を整へて、亂失せざらしめむことを、願ふべし、

次に洗面場に至り、

手に楊枝を執る時は、當さに衆生と共に皆妙法を得て、全く清淨ならむことを願ふべし

と、また楊枝 嚼みては、

晨に楊枝を嚼み當さに衆生と共に牙を調伏することを得て、諸の煩惱を噬まんことを願ふべし、

と、次に佛問に入りて、

如來を讚する時は、當さに衆生と共に我等亦如來の如く、一切の徳を具有せ



ひことを願ふべし

と、又手に經をとり、

經を誦する時は、當さに衆生と共に如來の説き玉ふ所に順ひて背くなからんことを願ふべし

と、次に食卓に向ひ

食するときは、當さに衆生と共に如來大心の甘露を味ひて、常にその、喜に充たされむことを願ふべし、

と食訖りて、

家に在るときは當さに、家難を捨離し、空法中に入らんことを願ふべし

又、

父母に孝事して當さに一切護養、永く大安を得んことを願ふべし

と、又

妻子集會しては、當さに愛獄を出て懸慕心無からしめむことを願ふべし

と、若し又、他出せんには、先づ

家を出づる時は、當さに衆生と共に、深く如來の智慧に入りて、とこしへに、此苦界を出てんことを願ふべし

と次に

歩を進めて道に向はり、當さに衆生と共に、佛の行きたもふ處に趣きて、最上の地に入らむことを願ふべし、

と、若し、

高きに昇る路を見れば當さに、衆生と共に、高く如來の道に昇りて、心撓むなからむことを願ふべし

と、或は又、

低きに趣く路を見れば、當さに衆生と共に、心ろ常に謙下して、佛の善根を長せむことを願ふべし、

或はまた、

直き路を見れば當さに衆生と共に心ろ常に直ふして、謬ふことなく、誑くことなからんことを願ふべし



次にまた

曲れる路を見れば、當さに衆生と共に、不正の路を捨て、永く惡見を除かむことを、願ふべし

若し又、路に

橋梁を過ぎなば、當さに衆生と共に、廣く同胞を度して、大覺の地に通はしめむことを願ふべし

若し又、路に

大河に逢はば當さに衆生と共に法流に頼かるを得て如來の智海に入らむことを願ふべし、

と、或は又

路に塵なきを見れば、當さに衆生と共に善根超出して、能く頂を見るものなきに到らむことを願ふべし

と、又た

路に塵多きを見れば、當さに衆生と共に、遠く塵盆を離れて、清淨の法を獲む

ことを願ふべし

もし路に

棘刺を見れば、當さに、疾く三毒の刺を去らんことを願ふべし、

と、

園圃を修むるものを見れば、當さに、衆生と共に、我等が心の園より、愛慾の草を除かんことを願ふべし、

と、若し又

花笑み、果實を見れば、當さに、衆生と共に神通の花匂ひて、菩提の果、實らむことを願ふべし

次に先方の、

家内に入らんには、當さに衆生と共に、一切の佛法の門に入らんことを願ふべし

と、若し又

家に入り了らば當さに衆生と共に、無上の堂に昇りて、安住して、動かざる



に到らむことを願ふべし、  
と又理髪に臨んでや、

鬚髪を理しては、當さに衆生と共に煩惱を断除して無垢清淨ならんことを願ふべし

と、入浴しては、

身體を沐浴して當さに衆生と共に身心共に無垢内外皎潔たらんことを願ふべし

又、

身を洗らはん時は、當さに身心共に、穢れなく内外すべて、清らかならむことを願ふべし

次に

水を以つて掌を洗ふ時は、當さに衆生と共に清淨の手を得て、如來の大道を、受持せんことを願ふべし

次に、浴終りて、後、

樓閣に昇らん時は、當さに衆生と共に正法の樓に昇りて、一切を徹見せんことを願ふべし

又晚餐後、若し、

牀座に端坐せば當さに、衆生と共に、安らかに菩提の座に坐して、心惱むなからんことを願ふべし

次に、

寝ぬる時は、當さに衆生と共に、身安きを得、心亂るゝなからんことを願ふべし

と、これ一日の實踐すべき禪の福音であります。(尙外に教訓あれど今は略す) 禪の境界にある人は、皆これを實踐底の人である、この眞摯なる實踐底より、修養更らに修養を重ねるときは種々の妙用を顯現し、或は先見の明あり格別の識見あり洒脱あり、て茲に始めて具眼の禪者と云ふべきであります。

## 二六 先見の明



或る甲乙の二人同郷の學生が夏期休暇のとき田舎へ歸つた、此二人一日散歩を試みんと相共に野に出て、遇ふ種々の談話に及ぶ時に甲の曰く、人はこの先見の明の必要を主張す、乙これを聞き然りとす、折しも彼方より一人の田舎娘が片手に重箱の包を持ち、片手は衣服の後をつまみ上げ、黒き足を出して来る、漸々進み来るに従ひ、乙の云く、君今、先見の明の必要を論ず、我方より来る娘の携へ居る重箱の中の品物の何たるかを知るやと甲の云く、我れ是れを知る、と、乙は此甲の以外の答へに驚き、然らば問はん、彼の品物は如何と、甲の云く、彼れは桃の類ならん、乙曰く、その桃は、何種に屬するやと、甲答へて云く、すもゝならん、乙は重ねて問ふて云く、數は幾何と、甲の云く數は凡そ六十四ならんと時に乙は、果して甲の答へは的中せりや否やを疑ひ、その娘を呼び止め、その次第を述べれば、娘はその事の意外に驚きたり、乙は、まだ半信半疑なれば、その重箱の開見を促し、たるに、實に美しきすもゝは中に、六十四箇を存したり、乙はこの答の的中に愈々感服し、その所以を問へば、甲の云く、これ即ち先見の明によるべしと、乙曰く、

然れども、その由つて來るところあらんと、時に甲の云く、升は、彼の女の着物の後をつまみ素股を出し居るは、これ包の中のすもゝなることを表し、彼女の、太織の單物に糊のこわく、付き居り歩を進むる毎に、ハツバくと音をなす、これ、ハツバくとは八々六十四なることを知るに足ると答へたとあります、

何んこの話は一場の滑稽に過ぎざるも、聊か興味ある話である、今禪の境界にありても、須らくその先見の明のあることを要す、禪に於ける先見の明は上叙の如き、一笑に附すべきものに止まらず、更らに客觀的確實性を有する、先見の明を要するのである、碧巖第一則の垂示に云く、

山を隔て、煙を見て早く是れ火なることを知る、牆を隔て、角を見る、便ち是れ牛なることを知る、擧一明三、目機鉢兩、是れ衲僧家、尋常の茶飯、

と、ありまして、カンと云へばチンと云ふ活機用は禪者の常である、されば古來の禪星の先見の明は能く參禪者の胚胎をつくの概がある、

禪家に徳山の棒と云へば、有名なものであるが、由來徳山は學人が佛法の大



意とか、祖師西來の意とか、と各々その所問に對して、汝に三十棒を喫せしむと、なぐりつける或るとき僧が、當時の禪星たる、臨濟大師のところへ参りまして、云く、何にか問ふと、何時でも、三十棒を喰ふが、この三十棒を免るゝ方法はないかと問ふた、ときに臨濟大師示して云はるゝには、貴様は、そのとき、徳山の棒を捕らへて、

如何なるかこれ、三十棒

と、問つてやらないか、と、これを聞きたる、僧は直ちに徳山のところに行き、

如何是れ佛法の大意、

と、問ふた、徳山は例によつて例の如く、

汝にこの三十棒を喫せしむ、

と僧を打たんとす、僧、即處にその棒を把捉して云く

如何なるかこれ、この三十棒

と、時に徳山和尚呵々大笑して、

貴僧は臨濟大師のとごろで學んできたな  
と云はれたとある、

これ師家たるもの、即ち禪的境界にある人は、チャント、先見の明に富んでいて、學人の心的状態を看破せらるのである、而して、此先見の明は、單に爲人接化の上のみならず、禪星自心の將來の約束も亦自由である、換言すれば、禪星は自他の上に行く先きが見ゆるゆへに、已れの理想の實現も亦可能であれば、理論の如く實行ができるのである、

近世の禪星、原坦山老師今や滅度のごとき、拙者俄即刻臨終可仕候に、つぎ、此段御通知申上候、

と云ふ端書を自分に認めて、友人に送られ、悠然、涅槃の雲にかくれ玉ふ、これが即ち理想の實現であります

## 二七 格外の識見

カーライルと云ふ人は田舎で文學を研究して居つた人であります、その著



述から、一朝名聲が高くなり、遂にはヴィクトリヤ女王の御耳に入り女王は是非一度カーライルに面會したいとのことと使者を立てた、ところがカーライルは云く、拙者は宮中に参る程の要事ある人間でないと言ふてお断りをした普通なら實に名譽と云はねばならぬの中に中々面會をいたしたい景色も顔に出さない、余り度々の使者であつたから遂にお目には掛かりに出た、スルト女王は玉座にましまし、カーライルはその御前に立つて種々様々のお物語をなされた、段々と時が過つて参りましたものだから、カーライルは云く、私は老體ゆへ御免を蒙りますと云ふて後の倚子に腰を掛けた、女王に御言葉を掛けて戴くすら有難い幸福なことであるにも係らず、腰を掛けるなどは甚だ失禮と云はねばならぬ、近侍のものも餘りの無禮ゆへ引立てやうとすると女王が目て制せられたものだから、近侍も別にどうもしなかつたとのことである、

これを考へて見れば、實にカーライルは無禮であります、併しこれはカーライルの力でなくては出来ません、一箇のカーライルの力ではない、だから、女王

も此無禮を如何ともすることが出来ない、却つて御許しになつたと云ふものは、女王以上の識見があつて、その力が女王を動かしたからである、禪も亦これと同様に超關脱落獨立無伴の境界であれば、凡塵を越格する底の格外の妙術を顯現し、王公貴人も眼中にないのであります、

彼の腹立坊の風外と申しまして、自分で腹立坊主を書いて、その自賛に、  
 教外別傳なし、本來一物あり、もの云はぬからは、心に一物なくてはかな  
 はぬ

### 腹立坊主

やつた、風外禪師と云ふがある、禪師は上州碓氷郡土鹽と云ふ山間に生れた人で七八歳の頃出家し、師を尋ね道を訪ひて參禪をなし、後渭川老人の毒に觸れて忽然として大事を徹照せられ人て風外々と禪林を動かした方である、禪師は相州の成願寺の切なる招きによつて、住せられたが、意に充たぬところがあつてこの寺を辭し、曾我中村の山中の穴の中に打坐し、飢ゆれば村に出て食を乞ふ、飯來しては一色辨道をして居られたものだから、村民



は乞食坊主と呼んで居たとのことである、後こゝを去つて眞鶴山の岩洞に入つて打坐せられた、こんなところに居られてもその道風は世の中に響いた、此頃のことであつたと思ふが、小田原の城主稻葉侯が大に風外和尚の徳風を慕ふて是非一度逢たい使者を差向け城中へ招いた、普通ならカーライルと同様に断るであつたらうに、さすが、救済を以つて立つ宗教家であるから、招きに應じて参つた、ところが稻葉侯、丁度來客にて酒宴中、どうすることも出来なかつたものだから、先づ客間へ通した、風外和尚は之れを喜ばない、元より禪僧は、須く参禪の精神あり、参禪の爲めには、喪身失命をも顧みないと云ふものなら、大喜びであるが、稻葉侯いかに來客とは云へ客間で待たして置くと云ふことが抑も喜ばない、稻葉侯も大抵にして早く出て、面會すればよいのに中々出ない、風外直さま筆を取り、

太守一國鎮、我是風外身、  
卒客無卒主、宜假不宜眞、

と走り書きに、屏風の上へ眞黒に書きまして歸へつてしまつた、

これ風外和尚の眼中には、高位榮職の人、王候貴人を慕ふのそんな、腰の抜け、境界ではない、眞に來るものは、之れに慈眼を以つても迎へやうが、時に臨んでは、風外之れ獨尊佛なのであると云ふ識見である、

稻葉侯に於いても、此風外の識見をば、益々慕ひまして、後に眞鶴山の絶眺の土地を撰びまして、長興山と云ふ立派な寺を建て、風外和尚を勧請した、ところが、その懇招を受けず辭せられた、致し方がないから黄檗の二代木庵禪師の上足なる鐵牛禪師を屈請することになつた、鐵牛禪師も中々の英雄であつたのである、稻葉侯或時、鐵牛禪師と同遊て風外和尚を訪れ、鐵牛禪師の曰く、貴下は世塵を遠く離れ、寂黙をこれこととして居られるが實にうらやましいと申しますると、風外の云く、

あゝ世を通るゝことは、造作もないことで、又出家も造作はないが併し出家後の出家は、六ヶ敷、現今の僧の多くは袈裟下に人身を通して居るが眞の出家は少い、又世を捨つるも、同様なり云々

と云はれたとある、



是れこの言は出家は六ヶ敷ないが、出家後、寺を出づることが中々困難であると、あく迄、超關脱落、識才凡骨を後の卓見を堂々と主張して居らるゝので、實に世の大臣の倚子をねらうなどの輩は、一度この格外の境界に住して凡聖を轉ぜしむるの勇氣を欲しいものである。

## 二八 教訓的識見

以上に述べた識見を單に糞力味の識見とのみ思ふてはなりません、この禪的識見には無量の教訓の内在して居ることを忘れてはならぬ、殊に圓覺寺の誠拙和尚の如き、教訓的の偉人であります。

雲州松江の大守は誠拙和尚の鉗鎚を受けた居士ですが後不昧公と稱して中々文武兩道に達し且つ茶の湯等をも心得たる、賢名なる殿様であつた、誠拙和尚晩年のことであつたが京都の相國寺へ行かれた時、恰も寒風凜烈、はだへを裂くの候道中は中々寒い、殊に箱根山中の如きは大雪であつた、和尚は、籠の中で小さくなつて、とこ／＼關所近くへさしかゝりますると、向から下

に／＼と警蹕の聲をかけ行列でもつてやつてくる大名がある、供のものに何藩だと聞くと雲州松江の城主であるとの答へに、和尚、これは近頃よいところて遇ふたと思ふて居ると大守の方でも誠拙和尚と知つたと見へて、籠と籠とを相近寄せて、一別以來の四方山の物語を初めた、その話の折柄、誠拙和尚の曰く嗚呼恐僧も血氣の頃は、此の箱根を寒中ても素足であるいたものだが、此節は年を取つたせいだ寒くて仕方がないと云はれた、(話の中にこんなことを云ふのが禪僧の探竿影像じや)さればにや、不昧公、氣の毒じやと思はれたと見え、尊師は箇様なものを御持参なきかと、銀の手灸ていしを出された、時に、和尚は、ハハアこれは、實に調法な品物じや暫時拜借じやと云ふので手を灸ふつて居られたが、供に命じて、籠をやれ／＼と聲をかけられたれば、籠は先に進む、和尚銀の手灸を奪つて平氣で上方へサツサと上られたとのことである。

何んと趣きのある話してはありませぬか、いかに懸意とは云へ堂々たる大守の手爐を無斷で奪いさるに就ては、何にかこの間に不言の消息のあることを看破



しなくてはならぬ、これが禪の修養であります。所謂この識見の態度は、抑も、一箇の武士たるものはいざ、鎌倉と云ふときには、寒暑の區別なく、千軍万馬の中に、出沒到來するのが、武士の天職である、否、一舉手一投足、手の舞、足の蹈むところ、悉く戦場の面目、である、此面目にして干戈を動せず大平を致すと云ふものである、されば武士たるものが、いかに寒中とは云へ手火鉢をかへ込むとは、いく地なしや、禪的修養を忘却したかとの針鋸であります、さればにや、禪僧が往々卓見を弄せらるゝも、決して、滑稽に出づるのではない、常に本務の遂行をこれこととして居らるゝその餘歴であります、又

誠拙和尚が自坊の(圓覺寺の)の門を建立すると云ふので、その歸依者たる深川の富豪、海津傳兵衛が五百兩の金を持参して、誠拙和尚に差出した、和尚の云く、マ、ソ、かと云はれて懐へ入れられた、傳兵衛も和尚の定めし喜ぶならんと思ひの外、無味のあいさつに、いさゝか癢にさわつたか、兎に角その日は家に歸りけるが、どうも胸がいせぬから、二三日過ちて和尚のところへ行きて云く、

五百兩と云へば大金であるのに、貴僧も御禮位は云つてよいと思ふが餘りでは御座らぬかと

申しますると、時に和尚の大喝一聲して云く、馬鹿ものめあの金は、拙僧の爲めに寄附したのではない、貴様の福因を植えたのじやと、叱かれたとのことであります、これを聞きたる海津氏は成程と合點し、益々和尚を歸依したとのことであります、

何んと有難い話してはありませぬか、禪の境界にある人は、その識見に於て、無量の福音があるのであります、

## 二九 鍊膽禪

また禪の境界になると、充分に心膽が鍊れて参りますから、少し位のことには、ピク／＼驚くものではありません、

これは、上野の戦争前のことであつたと思ひますが、西郷隆盛、或る日無聊に苦しみまして、舊友なる大辻是山師を訪ふて、禪機の妙味を語らんものと、



面會を求めたことがある、時に取次のものは、西郷殿を客間に通して、去つて仕舞つた、いくら待つて居つても、是山和尚出てこない、西郷公も大に閉口して、ア、拙者を一ツ弄ぶ考へだなど、推察したものか、好し一番、拙者が一ツ先きに是山和尚を一驚せしめてやらうと待ち設けて居ると、その中に足音がしだした、ハア、和尚だな、よし、竊かに障子の影に身を寄せて待つて居た、是山和尚そんなことゝは露ゆ程もしらねば、靜かに障子を開けて中に入らんとするや公は突然飛び上がり、和尚の何故に來ることの甚だ遅きやと、大聲疾呼した、時に、ハア「老僧住持事繁し」と靜かに答へられた」と云ふのは、拙僧も寺を持つて居ると中々多忙じやと云ふ答であつた、西郷公も癩に障つたが、腰に手を掛け、今にも眞二ツにせんとする勢をなし、正當慙慙のとき作麼生、と第二句を放つて、和尚に一驚を與へんとした、時に和尚も修養底の人じやから、直ちに、大喝一聲して喝と叫び、坦然として座につき更に驚く景色はなく、例の如く、種々の珍らしき物語りをなされたとある、と、ころは、普通凡人の思慮するところではないのであります、又

そのかみ、支那から渡られた、東皐心越禪師と申す御方があります、禪師は曹洞の高僧英傑で禪定と云ふ點には充分その心膽が鍛鍊して、事に當つて、驚く様なことはなかつた、御方でありました、その歸依者も澤山あるある中に、水戸黄門光國公は、ことの外、禪師の徳風を慕はせられ、祇園寺といふ寺を御建立になり、禪師を請せられた程であります、或日のこと、光國公、一ツ禪師の心膽を試みてやらうと、お思召し、公の宅へ招かれて、山海の珍味を饗し、大盃を禪師に勧め、これに酒をなみくと、盛りまして、今や禪師が之れを口にせんとするや、隣室に於て大砲を一發ドンと放なれた、普通なら大抵のものは驚くのであるが、禪師は神色自若として、一滴も溢さずに吞まれた、公は、ヤア大に失禮したと述ぶるや、禪師の云く大砲は武門の常じや別に、御配慮御無用で御座さると云はれた、而して禪師は公に御返盃と云ふてさされた、公盃に口を當てんとするとき、禪師は忽雷の如く、一喝を下された、その喝と云ふ大聲疾呼に驚天して、盃を轉覆かやし、公の云く何をなさるか、禪師の云く、喝棒は、禪家の平常底であつて別に斟酌は致し申さ



すと云はれた、とのこととであります  
 何んと、定力のありて、心勝の能く修鍊してあるものは、凡夫と聊か異なるところがあるてはありませぬか、

### 三〇 頓智禪 其一

頓智と申しますと、何んだか、その場を誤魔化して、俗に云ふ御茶を濁らかすと云ふ様な、意味でいかにも、人を愚弄する様な嫌があるが禪僧の幼少時代に往々試みるところの頓智なるものは中々その趣があるものである、

かの臨濟で有名な品川東海寺の開山澤菴禪師は近州正福寺の義禪和尚の御弟子でありまして、幼名を禪二と申しまして幼少から禪學を修め、才力も一寸ありましたものであるから、問答などを致しましても、三度に一度は義禪和尚も参ることもあると云ふ始末でありました、或るとき義禪和尚が、突然に手を、お拍ちになつて云はるゝには、禪二や、此手の音は、左の手で鳴るのか又は右の手で鳴るのかと問ひますると、禪二はツカトと進んで鬨を兩足

に挟みて云く御師匠様、私は、左の座敷へ這入りますか、又は右の座敷へ這入りますかと、時に和尚の云く、貴様は拙僧が左へ這入ると云へば、右と云ひ、右へ這入ると云ふたら左へ這入ると云ふてあらうがやと申しますと、禪二とりあへず、お師匠様も、私が手の音は左で鳴ると申したら右と云ひ、右で鳴ると申したら左で鳴ると、おつしやるであらうと云ふたとのことであります、

何んとこの相見問答の間に禪的の赴きがあることを窺ふに足るてはありませぬか而して又、

以上の問答の後、約一週問程立つてからのことであるが、禪二は本堂の掃除をして居りますと、門の方から行脚僧が袈裟行履を肩に掛け、手に鐵のゴツを持つて這入て來まして、タノむくと呼ばはりますから、禪二は早速、庫裡の方へ参りまして、應接に出ますと、雲水僧の云く、拙僧は越前の〇〇寺のものであるが、當寺の大和尚と一つ問答を致してみたいので参りましたが大和尚は御在宅であるかと問ねました、禪二「ア、折角のあいだであるが、



和尚は風邪で臥して居られる面會謝絶であると答へた、雲水も閉口して、然らば他日窺い申さんとて立ち去らんと致しますと、禪二云く「モンク、貴僧も折角の御尋ねであれば、何か問答とあれば、拙者がやりますと、と催すと、雲水僧の云く「貴様の様な豆小僧が何んて問答がてきと冷かした、禪二「ヤア、貴僧は餘程馬鹿ものである、姿が小さいと云ふが、成程、重い荷物でも担げとか脊負とでも云へば、出来ぬかもしれぬが、禪學上の問答は姿の大小には關係はないことだ、山椒は小粒でもヒリ／＼辛ひ、大きな唐辛でも辛くないのがある、何んだイコ馬鹿にするなり、獨活の大木、銀真鉄瓜と雄辯滔々とやらかしますから雲水僧も、イヤハヤ、能く喋舌る小僧だ、近頃以つて面白い、一つ試みに拙僧に尋ねろ、と、申しますと、禪二「宜しい尋ねるとも、併し、拙僧を小僧と思ひ馬鹿にしたから普通では置かぬ、雲水僧「然らばどうする考だ、禪二「貴様も鐵骨を持つて居られる、拙僧は、幸い箒を持つて居るから、私の問ひに答へられるれば、貴僧に拙者を三十棒でも四十棒でもお叩きなさい、同時に私の問が答へられぬと、此箒で打つて打

つて打ちまくる考へてあると申しました、時に雲水僧はカラ／＼笑ひ、これは面白約束じや早速承知をいたされた、雲水の云く、何んでもさけ、禪二云く、然らば問ふ、三度問ふ、三度問ふて答へぬと、打着するぞと念を入れて問ふて云く、

インセツハ、ネヤハタンベウ、ツクイズカ、

とは如何にと申しますと、雲水僧、無言、又云く

インセツハ、ネヤハタンベウ、ツクイズカ、

とやります、雲水僧には更らに分らぬ、又問ひ返して、

インセツハ、ネヤハタンベウ、ツクイズカ、

と、三返問ひますと、例によつて分らぬ、禪二は此時と思ひまして、箒でも二十も、打つて打ちまくりました、スルト、雲水僧もホウ／＼の体で飛びだしたとのことであります、

これは、考へて見れば、何んでもない、禪二が普通のことを聞けば、必ず答へるから、彼れの考への及ばぬ所を尋ねんものと、



雪隠の、屋根の飄箆、敷いくつ

と云ふことを、倒さまに「インセツノ(雪隠の)ネヤノタンベウ(飄箆)ツクイズカ(敷幾つ)とやらかしたのであります、つまり雲水僧の考以上の所を尋ねんものと着眼いたしましたる點は、彼れの英漢なるところであります、

### 三一 頓智禪 其二

かくの如く幼少より禪機を有し、頓才の、人に卓越し、その非凡なる趣味を持つたものは、甚だ多いので、一休も又その一人であります、

或る日一休、フラリと蟪川新左衛門の宅に参りまして、蟪川が此頃丹誠して造りました角池を見まして、池の傍に一の標札を立てた、その文に云く、

この池は角池にあらずして丸池なり

と、書かれました、時に蟪川先生は不思議に思ひ、詰じりて云く、現に見らるゝ通り角池も角池、眞四角の池にはあらずやと云へば、一休の曰く、否とよ、誰れが見るも此池は丸池なりとて、蟪川の言葉に肯んずる景色もなかり

ければ、蟪川はその所以を尋ねけるに、一休徐ろに答へて曰く、貴殿の凡眼で見たら角丸とも見へやうが、愚僧の目には丸池だ、ト云ふものは、貴殿も知らるゝ通り此池の水は濁つて居るされば水の澄むときとは無い、こゝに於てか、この池は水が濁つて澄まない(隅ない)とあれば澄のない(隅のない)池なら丸き池にあらずやと、これを聞きたる蟪川も大にその活作略にいと感服をいたされた、而して蟪川は、一案なして曰く、ヨシ、二三日過ぎなば、天気も快晴になるらめ、若し晴天つゝかば此池は忽ちに水は澄み渡る、そのとき一休を招きて、一つ鼻をあかしてやらんものと、時の至れるをまち、使を一休方に遣しけるに、さすが一休ハハアまた池の相談かなと云はれたとある、ヨシ、早速参らんと使と共に蟪川方へ同導せられ、一ト通りの應談を了し、けるに、時に蟪川、池を指して云くいかは一休殿、今日は池の水が澄み渡り居ることなるが、サテ池は丸角に候や、と、定めし一休殿も大に閉口なされたるならんと、顔見つめけるに、一休の云く、然り、一昨日の丸池は亦今日も丸池なり、何んぞその形に變化あるべからずと申されたれば、蟪川



いと奇怪に思ひその所以を尋ねけるに、一休の云く、この池は今日餘り水が澄んでく澄きつて(隅切つて)居るから隅切つた池なら何んと、九いては御座らぬかと答へられたとある、

と、九い玉子も切りよて四角、世間の事、またこの妙術を出てないのであります、

三二 頓智禪 其三

以上の如く、頓智も中々趣味を有するもので、この頓智も、禪機を帯んで來な  
くてはいかぬ、禪に所謂、作家の漢とか、伶俐の漢とか申しますのは、この  
才機の即處々に運用巧みなるを云ふのである、

京都黄檗山万福寺の山間に曹洞滅却と云ふ金看板を掲げまして、もし曹洞宗  
の坊主にして此看板に手を付けたものがあるならばこの鋭き大薙刀を以つて  
直蕩に切斷せんと、その氣慨當るべからざる、傑僧隱元を一喝のもとに金看  
板を蹴飛ばしたる、曹洞の英僧、甲斐の祖曉、あるとき、寺務多忙にしてす

暇もあらざりしに、突然某家より死亡を報じ來り、その引導を請へり、祖曉  
和尚も餘り卒ハヤかのことなれば、引導を作ること能はず、併も棺に向ひたるに  
唱ふべき、言句もあらざりけるに、その中、大雨降り來り、一疋の犬、雨に  
驚きて、便所の方へ逃れ去りけるを見たり、時に和尚忽然躍如として、一句  
を吐露して云く、

天、鎗を下す、數十本、犬東厠に走しる蕘直去、甲斐の祖曉に轉結なし、嘆  
と、云つて引導を渡してたとのことである、

三三 頓智禪 其四

この頓智なるものは、單に間に髪を容れざる妙用を出没自在に顯現すると云ふ  
のみでなく、その才幹の運用や、引いて、社會國家の上にも又多大の効の存す  
るものなれば、この頓智を養成することは、甚だ大切のことである、殊に、上  
の者が下の者を處理し、統御して行くには非常に必要であります、

或る人、己れの家の釜を失ひ、その搜索の結果、隣人のこれを奪ひ去れるこ



と稍明らかになりければ、このものは隣人よりその釜を受け取らんとせしに、隣人はその不當をならし、罪に服せず、遂に官に訴へた、時の官主藤原兼光は、直ちに隣人を召換して、これをたゞしけるに、隣人は辯して曰く、我は、塞なり、常に地に控して行き暫時も手を離るれば歩行すると能はず、されば我れは、釜を持ち去ることは、断じて不可能のことなりと、成程このものは塞にして手をさしおきては歩行のできざれば、衆人これを聞き、實に然りとして官主にその罪を許さんことを乞ふに、官主の智見は能く隣人の内心を觀破し居れば、隣人に向ひて云く、汝の言實に然り、されば此釜は汝の所有なるべしと、隣人に渡しけるに隣人は大に喜び、その釜を頭に戴きて、去らんとす時に、兼光これ捕へて、その罪を厳しく尋ぬるに、隣人は遂にこれを覆すこと能はずしてその罪に服せりと云ふ、

何んと、この機智なるものは、人を御する、に、いかに必要であるかを知るに足るのである、

### 三四 頓智禪 其五

頓智は時に、この思ひやり即ち同情的となり測隠の心と同化して、現はるものである、人の井中に飛び込まんとするを見ては、直にこれを救ひ、人の虎穴に陥れを見ては直ちに善巧方便を運らしてこれを憐む、これ道徳的、宗教的の着色を帯べる頓智である、これ禪に所謂頓智にして、吾人はまた、この同情的頓智禪を吾身に修養することは大切である、

或る製造會社に於て、その工場に非常に大なる、烟突を造り、愈々落成して、今や足場を悉く取り拂ひ、多くの工夫は、既に立ち歸つた、然るに如何なることにや、一人の工夫は烟突の頂上にありて、足場は拂はれ、併も最後に降り下るべき綱まで取り去られければ此工夫は狼狽して、轉び落るか、飛び下りの外、その術なく、危機一髪の場合となつた、時に會々下に遊べる小兒、その由を告げればその妻はこれを聞き、大に驚き、取るものをも取りあへず、急ぎ、その場に駆け付け、大聲擧げ夫に告げて云く、御身は靴足袋を脱



ぎ、その毛糸をほぐし、その先に、セメントの小片を付けこれを下に垂れよと  
叫びければ、夫は聊か安心の體なりしが、而して糸は垂れて地に到れば、妻  
はこれを捉へその端に細繩を結びつけ、上よりこれを引き揚げたるとき、再  
びその端に太き綱を結び付けたれば、夫は、その綱を得、これを烟突の先に  
結びつけ、無事に下ることを得たとのことである、

何んとこの妻の考へは、能くその機智を運らして、その救済法を案出したもの  
ではありませんか、これは妻が夫に對する頓智の利用であります、社會相互  
の間に於けるも亦この頓智を發揮してそを利用することは大切なことでありま  
す、

### 三五 頓智禪 其六

この頓智なるものは、また非常に趣味を有して居る、ものがありますが、これ  
らは、普通凡人の仕業では中々できなないのであつて、多くの修養を積まなくて  
はなりません

蜀山人が伊勢から三州の伊良湖に渡航せられたことがあるが、その時、丁度  
波烈しく、船は左右に振れ、多くの弟子どもは勿論のこと蜀山人も遂に心持  
が悪くなり、俗に云ふ小間物店を始め、(吐嘔のこと)キクキク、グーグー云  
つて、眼からは涙を出し、非常に苦しさ様子でありました、時に弟子達は、  
師匠に向つて云く、日頃快活に洒々落々たる、先生もこの際に臨んでは、歌  
も詠ずることは出来ませぬ、先生、一首詠めますかと、そのノド頭をつさ  
ますと、先生の曰く、

讀めば讀む、月と云ふ字は、二つ讀む、

月とても讀む、月とてもよい

と、やらかしたとあります、同じ頓智とは云ふもの、聊か脱落底の境に安住  
して居るところがある、吾人は一度は此妙味を知る必用があると思ふ、

著者は前來此頓智禪に就いて種々の機用をものして來たが、人或は、禪に云ふ  
頓智なるものは、イト、滑稽のものに侍るなれと、瑯瑤するものもあらうが、  
それは、禪の眞智とは何なるものか、邪智とはいかなるものかを知らざる輩の



云ふところでありまして、實に取るに足らぬ論であるが、いまその婆心を以つて天桂和尚の智慧の辨を聞かそう、

犬の井に臨みて已か影を吼るは是れ本來本具の大般若智を昧ますなり、善悪や順逆や總じて是れ妄想たり、此妄想に執する人は賊を認めて子と爲すなり、初一念を好しとす可からず、二念三念を悪しとす可からず、只一念轉處を一念とする之を實智慧と云ふ

と、この眞智慧の三昧は一す凡人には分るまいがこの眞智慧を立ち場として即處々々に出没自在の妙用を顯現する底頓智禪の面目でありますから、決して禪の頓智は、しだらのない無根據のものと誤解してはならぬ、

### 三六 智術としての禪

禪に於ける智の修養は一の頓智として一時的のものに止まらず、進んでや宇宙を吞却し、他を動着する底の智を得なければならぬ、

虎關師練禪師小沙彌として、寺内にありしとき、一日公卿の小兒等と共に門

前に遊びけるに公卿の小兒等、禪師の父が、微官を恥しめんと欲して各々家の系圖を名乗りつゝ、門前の小さき溝を飛び越ゆべしと約しあへり、時に禪師は、彼等は各々大納言中納言の家系なれば、定めし、我父の微官を恥かしめん者ならん、よし我先に名乗りて此溝を飛び越へんと、我こそは百世の英雄千古の模範、三界の大導師釋迦牟尼世尊の法孫師練と呼ぶものにて候と云ひつゝ、飛び越へければ、他の群童等は呆然として一語も發せざりしと云ふ機智も此位に權威を保たねばならぬ、而して此智術は、時に臨み、處に應じて、七通八達百發百中の妙用を顯現せねばならぬ彼の鬼谷先生の曰く、夫れ仁者は貨を輕んず、誘ふに利を以てすべからず、費を出さしむべし、勇士は難を輕んず、懼れしむるに患を以てすべからず、危に據らしむべし、智者は理に明かなり、欺くに誠を以てすべからず、示すに道理を以つて功を立てしむべし

と、これ一種の智術であります又觀音の三十三身の應化と云ひ、釋尊の四悉檀と云ひ、皆これ、臨機應變の智術である、されば、僧あり趙州に向つて問ふて



云く、狗子佛性ありや、趙州曰く無、又僧の云く何人によつて無なると問はば、趙州の云く狗子佛性、有と答ふ、時に有と説き、無と談ず、これ禪僧の老婆心より出てたる智術であります、碧巖第八則の垂示に云く、

有るときの一旬は踞地獅子の如く、有るときの一旬は金剛王寶劍の如く、有るときの一旬は天下人の舌頭を坐断し、有るときの一旬は、隨波逐浪、

と、これその禪者の日用受用する大智術である、先きの師練禪師の公卿の小見を打着したる一喝は所謂天下人の舌頭を坐断した一旬である、

伊太利のガブールは至誠にしてその行狀に於いて間然するところなき併も、忠君愛國の人であつた、然れども、彼れの手腕たるや、應機接物、縦横無盡の智術を有し、彼れは、當時、國民のその塗炭に苦しめるを見るに忍びず、如何にもして、埃國の毒手より民を救はんと日夜焦慮するもその良策なきを以つて、彼れは海外に遊び各國の大勢、人情風俗、帝王の志望等、有らゆる百般の方面を考究し、歸り來つてサルデニヤ王國の宰相となるや、この時を遊説の機と、先づ佛國に往き、第三世那翁に説きて曰く、汝の知る如く伊太利の

貧弱にして國民の悲惨、見るに忍びず請ふ翁の力により埃の毒手より離れしめよ、若し事成らばニース、サボイの二州を酬ひんと、これ、翁は貨を好み、虚榮を欲するところなれば、カブールはその消息を道破して、この一旬をなすものである、

彼は又去つてグラッドストーン(英國)に説いて云く我國民の慘狀公一度來つて見よ、必ずや、公を動かすものあらんと、ク公行きて、その状態を觀察するにカブールの言の如し、グ公見るに忍びず、檄を四方に放ち大に國民に訴ふ、グ公は元來仁々の士にして貨を輕んじ誘ふに利を以てせず資を出さしむるの人であれば、カブールが義節を以つて説きたるものである、

これ、カブールは、國民を埃の毒手より去らせんが爲めに兵力を那翁に仰かんことを説き、その資を出さしむる爲めには、憂國、誠忠、資を出さしむる術を有するグ公を説ける、元よりカブールの人格は至誠の人なれども、その國家經濟の爲めには、その臨變の妙術を施す、何んと、與奪自在の大智術の策士ではありませぬか、



臨濟慧照大師晩衆に示して云く、有時は奪人不奪境、有時は奪境不奪人、有時は人境俱奪、有時は人境俱不奪と、時に僧あり問ふ、如是奪人不奪境、大師云く、煦日發生して地に鋪くの錦、嬰孩髮を垂れて白きこと絲の如し、僧云く如何か是れ奪境不奪人、大師云く王命已に行はれて、天下に偏し、將軍塞外に煙塵を絶す、僧云く如何が是れ人境兩俱奪、大師云く井汾絶信獨處一方、僧云く、如何か是れ、人境俱不奪、大師云く王寶殿に登れば、野老誣誦す

と、これを四料簡と稱して居りますが、この四料簡は所謂、禪の大智術でありまして、大政治家として立つにも、法律家として立つにも、百般の事に、應用すべき術であります、一々これを解釋すると繁に涉ることであるから、今無邊俠禪渡邊子爵が會つて臨濟の智識に向つて我に四料簡の新釋ありと、一々ものせられたるものあれば、左に示すこととしよう、

○如何是奪人不奪境

答へて曰く、

鐘は鳴りやせぬ、撞木がなるよ、

撞木がなければ、鳴りはせぬ、

○如何是奪境不奪人

答へて曰く

鐘が鳴るのよ、撞木はならぬ、

鐘がなければ、音はせぬ、

○如何是人境俱奪

答へて曰く

鐘もならない、撞木もならぬ、

鐘と撞木の、間がなる、

如何是人境俱不奪

答へて曰く

鐘もなります、撞木もなるよ、

かねと撞木で、音がする、



と。答へたこのこととあります、其他四喝と云ひ、四賓主と云ひ、三玄、三要五位と云ひ、皆この處世の大智術であります。

### 三七 光風禪

光風禪など、申しますると、一寸新術語であるから、呑み込みの出来ぬ御方もありませうが、これは唯譬喩的に名を與へたので即ち、心の高明なるを云ので、そのよりどころと申しすは、書言故事に、

「黄魯直曰く、春陵の周茂叔、人品甚だ高し、胸中洒落なること、光風霽月の如し。」

とありまして、洒脱として垢穢のした、境界を云ふのであります、古來禪味を解し、その奥道に體達せる人は、殆んど、此洒落脱俗、趣味浸々たるものがある、こゝが倫理や道德などの窺ふことの出来ぬところである、

知る人ぞ知る、禪海の龍象、穆山老禪師、某の依頼に應じて、達摩と妓女と

の對面の圓に、ものせられたる、贊に云く、

九年面壁なんのその

わたしや十年浮き勤め

煩惱菩提の二筋に、

わたしや誠の一筋を、

加へて三筋で日を暮し、

糸が切れたる成佛と、

客の相手にのむあみだ、

濟度なさるとなさらぬは、

それはあなたの御了簡、

外に餘念はないわいな、

と、何んと禪師が心胸の洒脱思ひやらるゝのである、又大綱和尚の瓢箪の圓にものせられたる水莖のあとを讀み下せば、

飄々、汝眞瓜の位もなく、西瓜の暑さをはらふ徳も不然しかれども、氣の輕



中むなしくして無欲なれば、仙人も汝を友として酒をいれて腰に携へ、あるは、駒を出して樂しめり、汝瓜の類にゐて、庖丁の難に合はざるは智なり、餘ヒコを押へてのがさしむるは仁也、羽柴公の馬印となりて強敵をくだくは、勇なり、汝ちの性は善なりといふべし、

うかくと、くらす様でも、瓢箪の

胸のあたりに、しめくゝりあり、

と、いかに和尚の光風霽月を友とし、その心胸の洒落なることが窺れるのであります、

そのかみ、東海寺の出入りのもの、澤菴禪師のところへ花魁おんぎんを書ける懸物を携へ行き是非一つ賛を願たいと頼みけるに、禪師は、これを一覽し、ニッコリ笑ひ、あゝよく書いて、あるわい、どうか斯様の美人を側に置きたいものぢやなあと、獨り言を云ひつゝ筆を執り、

佛は法を賣り祖師は佛を賣り、末世の僧は祖師を賣る、汝五尺の真中を賣つて、一切衆生の煩惱を安んず色即是空、空即是色、柳は緑り花は紅の色

々乎、

池水に、よなく月は、通へども、

心も留めず、影も残さず

と、ものせられたとある、依頼の人は定めて禪師は困却せらるゝてあらうと思ひの外、忽ち賛をなされたれば、大にその禪師の洒脱の境界に驚いたこのことであります、

と、由來禪の洒落なるものは、單に談諧とか、洒落地口と云ふやうな、ものなりと速断してはならぬ、元よりその洒脱禪には、談諧もあり、戯謔もあり、嘲諷もあれども、その中に自ら教訓を含み、吾人が修養の進路を指びさす、指南車であります、天桂禪師は、寒山拾得に對して

拂ふべき、ほこりもないに、箒持つ、

人の心ぞ、ちりとなりぬる、

拾得寒山に答へて

拂ふべき、ほこりもないと、いふ人を



拂はん爲めの、箒なりけり

と、贅せられたとある、又酒脱を以つて聞えある桃水和尚  
如是生涯如是寛

弊衣破梳也閑々

飢餐渴飲只吾識

世上是非總不干

と、弟子を戒められたとのこととあります、吾人は、上叙の如く、酒脱の境界  
にあり光風霽月を友とする底の衲子とならねばならぬ、

### 三八 耐忍禪 其一

踏まれても、根つよいいのべ、福壽草、

やがて花さく、春を待ちけり

と、實に人の成功はこの耐忍禪にあるのであります、我國などでは堪忍五兩、  
とか、短氣は損氣などと申しまして、耐忍すべきを教へてありますが、この思

想は世界各國通じて、教ゆるところとあります、英國の俚諺には、「耐忍は凡て  
の戸を開らく」と云ひ、露國では、耐忍せよ兵士よ、戀て大將と爲らんと、獨  
逸では耐忍は快樂の門と云ひ、又耐忍惡魔を食ふと云ひ、和蘭では耐忍は學問に  
優れりと云ひ、伊太利では耐忍と時間とは金錢と万事とに勝つと云ひ、又羅甸  
などでも耐忍は勝利なりと申しまして、皆此思想を鼓吹して居りますが、なる  
堪忍は誰れもするが成らぬ堪忍は中々難いものである、

禪界の碩徳、西有禪師或者に家内安全の陀羅尼を授けて曰く

庵ニコノ腹立つまいぞや娑婆何

と、實に家内安全、夫婦兄弟、一家擧つての無事長久法は、此耐忍にあるので  
ある、彼の

忠臣四十七士の一人に神崎則休と申しまして、一名千崎彌五郎と云ひ、勘平  
切腹の場へ顔を出す二人の武士のひとりでありましたが、彼れ淺野家断絶して  
より後大石と心をあはせ、主君の讐を討たんといたしまして姿を變へ下向い  
たした、途中、濱松の城下に差しかゝりますると一人の馬士が則休に申すや



う、幸ひ戻り馬てありますから、安すく参りませうと促しましたから、則休は余り疲れても居らぬことゆへ再三の勧めも断りました、又も返すくも是非乗れと申しましたから、ツイ耳さわりせしか、拙者は馬はきらいであると答へければ、馬士は非常に立腹し、悪口罵詈雑言、かつ、強迫するにぞ則休もムツとせしが、いや／＼大事を前にひかへて居ることゆへ、馬士風情のものを相手とするところにあらざれば、彼れの云ふまゝに従ひおかんものと、顔を和らげまして、「如何にせば其許の御意に適ふやと」問ひけるに、馬士の云く「詮證文を入れるれば料簡すべし」と、則休心よく諾して、わび證文を渡しけるとかや、その文の要に云く、

士たる身を以つて貴殿に對し馬を嫌ひじやと申上候こと幾重にも不調法に候依而詮證文件の如し

月 日

馬士殿へ

神崎與五郎則休

と、世に忠臣と云はれ、人の鑑と云はるゝ程のものは、斯かる些々たることまで

も注意して腹を立てず能く堪忍のひもをしめたものである、これが所謂、唯、こゝ、腹立まいぞや、そはかの、實踐者と云ふべきであらませう、

彼ツルレ博士の坐右の銘に曰く、

汝が奈何んともする能はざる事柄に對しては怒ること勿れ、开は怒るも無益なればなり、汝が所辨の方法を有する事柄に對しては怒ること勿れ、何となれば、汝は汝の欲する如く所置し得るが故に怒るの必要なければなり、と、何んといふ教訓ではありませぬか

### 三九 耐忍禪 其二

阿育王或る時、臣に命じて曰く、人生に最要なる寶を天下にお求めになりました而して、某臣は王命により東西を奔走してその寶を搜索せる折柄、或るところに、堪忍の智慧袋と云ふ看板がかゝつて居りましたから、その價を聞きますと、店の主人の云く、これは少々高價であるが價千金である若、し之れを實地に御使ひなさるならば、千金以上、万金にもその効力があるとのこ



とてありました、これを聞きました某臣は大にその高價なることを驚きましたけれども、大分高價であるから、これぞ王の求め玉ふところならんかと、遂に買ひ求めんと、千金を渡しました、すると、店主の曰く暫時御待ち下さいと云ひ措て奥へ入つて行きましたが、程なく、恭しく、赤い朱塗の臺にのせて、持つて参り、云ふやう、「これが御注文の堪忍の智惠袋であると」差し出しました、某臣は、余程大きな袋かと思ひの外、僅か四句の偈文を書いた紙のされてあるから、手に取りましてよんで見ると、

長慮諦思惟、不當卒行怒、

今日雖不用、會當有用時、

と、堪忍の智惠こそ、元より宇宙大の袋、細には無間に入り大には方所を絶する無形の袋であれば、大小長短の音沙汰はありませぬ、參禪の士も是非この堪忍の智惠袋を買ふて置く必要があります、如何に學問がありましたも、この智惠袋がないと、とんだ間違があるものであります、

昔龍溪禪師と云ふ大徳のところ、に弘善と云ふものが参りまして、種々と議論

を致しました、時に禪師の云く、貴下は中々學問に於ては凡骨を抜く底の力があるが併し未だ、學臭がとれない、汝が爲めに手近い道を教へん程に汝一七日齋戒沐浴し來れと告げければ、弘善、禪師の言ふがまゝ齋戒し來りその要道を問ふ、禪師答へて曰く、汝能く護持せよと、堪忍の二字を示し、汝も若し事に臨まば堪忍々と唱へて無心となり三足後に立ち歸るべし、必ず一念も放逸なることなかれと之れを聞きたる弘善は、から／＼笑ひ信ずる景色もなかりしが、六年の後故郷に歸りしに、時恰も夜半、窺かに家の様子を見るに妻は夜業をなしつゝありしがその傍に一人の手拭を顔に覆ふたるもの、我妻と物語りつゝありければ、弘善が胸中、ムラ／＼と執念を起し、我れ永年の不在中間夫の出來しならんと直ちに入りて一打にせんかと劔に手をかけたりしが、時に、忽然として六年前の禪師の垂誠を思ひ出し、堪忍々と唱へ退身三步いたしました、ア、此處が禪師の垂範の存ずるところと來り方を伏し拜み、徐々として家に入りけるに妻出て喜び迎ふ、先きに、密夫と見へしは老母の未だ床に就かず物語りしつゝありしことの明了となり益々禪師の



訓誡を感謝せしとかや。

これが、所謂前に申しました堪忍の智慧袋の賜であります。

#### 四〇 耐忍禪 其三

*Be patient with every One, but above all with yourself. Francois of Sales.*

「人に對して耐忍せよ、特に己れに對して耐忍せよ」とはフランシス・オヴ・セールスの絶叫せるところでありまして、口でこそ耐忍とは申すもの、これを實行することは中々困難である、又、バンオンの曰く、

*Hold on; hold fast; hold out. Patience is genius.*

と、これ耐忍を固く把持せよ、緊く把持せよ、飽くまで把住せよ、耐忍は則ち天才であるとの教訓であります。

木村重成と申しますれば、豊臣氏の臣であつて誰知らぬものは無いと云ふ程の人物でありますが、或日のこと山崎三阿彌と云ふ茶坊主が、重成にいたく無禮を加へ、尙且つ若し腹が立つならこの山崎三阿彌を切れ、それを斬りよ

ぬやうては、到底、君前に於て名譽の打死など、氣のさいた業が出来るとか、散々に無禮の言を吐きました、ところが重成はニコニコ笑ひながら通り過ぎますと、又も三阿彌は、長門守とも云はるゝ名臣にして、拙者如き茶坊主に、罵詈雑言を云はれても、何んともないか、何んと臆病な、腰拔、士ではないかと威張散らかしました、餘りの大威張に、このことが家中の評判になりました、スルト重成の友達がこれを聞き大に憤り重成に告げて曰く、何故、茶坊主風情のものに臆病ものと云はれて、眞二ツに切り殺ろさざるやと云ひますれば、長門守の云く、蠅は帝王の冠に糞すて蠅と云ふ小さな蟲は天子様の冠にも止まるてはないか、彼れ三阿彌の如きもの、元より取るに足らぬ、若し拙者が一刀の下に切れば、殿中に血を流し却て君様より切腹を命ぜられ遂に蠅同然の彼の爲め一命捨つることゝなれば、折角主君の御馬前に捨つる此大切の身も空に歸すれば、聊か君恩の重きを顧み、三阿彌を助けやりましたと答へたとあります。

と、實に之れが、すて女の申しました、



うきことに、なれて雪間の、嫁菜哉  
と、また或る、句に、

氣に入らぬ、風もあらうに、柳かな

と、申しましたのも、この消息を道破したものでありませう、

#### 四一 耐忍禪 其四

子貢と云へる人、孔子先生に尋ねて云ふには一言で生涯を守り行ふ程の教が  
ありますかと申しましたれば、先生の謂はれるには、「夫れ忍歟」と答へられ  
たとある、

怒とは怒るべきにも忍ぶと云ふ心てありまして、遂に吾身をつねつて人の痛を  
知れと云ふのが、怒の意であります、この耐忍と云ふことは中々廣い意味合の  
もので、單に成功の秘訣だとか、家内安全と云ふことの教とばかり限きつては  
居りませぬ、宇宙大、世界大の徳を持つて居るのでありますから、若し人にし  
て此耐忍の徳を得ることが出来るならば度量宏廓として餘裕のある大偉人とな

ることができるのである、この忍の徳を欠ける人は内に忍の徳を持ち、外に忍  
を行する底の禪的偉人の面影を味ふて見るかよからう、

駿州原宿に白隠禪師と云ふ名僧があつた、師は諱を慧鶴と云ひ、幼少より諸  
禪師に就いて只管に参究し越前高田の英嚴寺性徹和尚のもとに大悟徹底せし  
禪海の傑物であるが後故郷の原宿へ歸り玉ひ、辻堂の如き菴に禪的生活をなし、  
東西の参禪の士を教化して居られました、師の行願隠れなく、村民は勿論の  
こと原驛の豪尙某殊に師の徳風を慕ひ、非常に歸依せられた、然るに此家に  
一人の處女がありました、どうしたとか常ならぬ身となりましたれば、  
父大に心痛し、娘の極めて實懇なる老婆をして、その譯を問はしめけるに、  
娘の云く父上の御歸依なさる禪師の胤なりと答へければ、父上之れを聞き大  
に憤り、今迄、禪師こそ潔き御方と思ひけるに人は見掛けによらぬもの、己  
れ、一つ恥かしめ呉れんものと、暫時秘し置き、分娩を待つて居りました、  
或るとき禪師には何心なく例により讀經に御出になりましたが、平日と變つ  
た取扱つかい主人の胸中一物の横たわり居る景色何事ならんかと思ひつゝも



月日を送りけるに、時至つて、小兒分娩せしかば、父は誓憤を晴し、物の見せ呉れんは此時なるべしと、未だ産湯もろくく遺せざる赤兒を懷に入れまして走り行き禪師の坐禪の膝に擲げつけて云く、覺へあるかと、禪師は、突然のことに大に驚き何事ならんかと、何はともあれ千佛は造るべし、凡夫は造るべからずと、アア、可愛いと大悲の涙を落し、可憐の縁兒を抱き慈愛の懷に容れ玉ふた、豪商曰くそれみよ、己れおぼへあればこそ、愛の涙をたへるにあらずやと睨視して立ち去りました、これが爲めに、禪師の名望立ちどころに落ち、弟子達は面目なく皆東西に離散してしまいました。

禪師はこれより赤兒を抱きつゝ隣家に貰ひ乳をなしつゝ風の朝、雨の夕の厭なく、世評を顧みず只だ耐忍を身に堅く守り育兒に餘念なく約一年の月日を経過いたしました、丁度誕生日に當るの夜、娘、父に向ひ申しけるは、先年禪師の胤と云ひしは一時の頓辭にして實は番頭の胤なり、とその節もし實を語らば、番頭の難を、をもんばかり斯く申せしなりと、父之れを聞き大に驚き直ちに禪師の許に至り身を地に投じ叩頭して、娘の白狀の次第を語り、禪師よ

如何様にも吾等を處分し玉ふべしと、時に禪師は耐忍の顔を聞き打ち笑みて苦勞は拙僧の疾なりと赤兒を渡されたりと云ふ。

如何に禪師が凡慮の考へ以上の境界に住し玉ふことを、是れ實參實究すべきであります。

#### 四二 高潔禪

次に禪は又高潔清廉を尊びます。

スマイルスは謂へらく、「嘗つてアチツ川の氾濫いたしました時に、ペロナの橋は、その中軸を残しまして、流れ去つた、而してその中軸には、一戸の家屋あり、今や濁流中に没在し去らんとするの有様であつた、これを目撃したる、スポルツイニリ伯は叫んで、曰く、誰れかこの不幸なるこの一族を救ふものはなきやと、若し、これを救ひ得ば、一百ルイスの賞金を與へん」と、時に一人の青年なる農夫ありて、小船に乗りその一家族を皆な救助し、無事に上陸せしめました、伯は大に喜び約束の金を與へんとせしに、青年の云く、



否とよ、吾は我が生命を賣らざるべし、若しその金にして能ふべくんば、此可憐なる一族に賜はれかしと、云ふたこのことであります、と、實に彼の青年は身に、農夫の衣服を着すると雖ども、その心や寡欲にして一點の塵りなく、高潔にして一塵の欲なきものであります、又た禪の境界に於けるも亦た然りてあつて、人たるの眞面目を遂行いたします、これは著者が既に禪の修養の一法として無欲を主張いたしましたが、今この境界の寡欲高潔はその賜であるのであります、

道元禪師はこの寡欲にして高潔でありました、嘗つて鎌倉へ下られ北條時頼の爲めに法を説かせられたが時頼の御歸依は非常なものであつて、大伽藍を建立して、請せんと致されたが、禪師は潔よくこれを断られ、越前の山深き處に清き生涯を送らんと立ち去り玉ふ、時に玄明と云ふ青年の坊さんが北條時頼より、お墨付を頂戴した、そは、六條の地、五十貫と云ふ廣い土地を貰ひまして、これを持參して歸へつたら禪師の定めし、お喜びになるであらうと思つて、永平寺もこれだけあつたら、宜いてありませうと自慢していた

禪師はこのことを御聞きになつて、非常な御譴責になり、何んと汚い根性の坊主ならずやと、遂に寺を逐いだし、且つ、その玄明の坐して居た床下の土まで、堀つてすてたと云ふことである、

何んと禪師はその御精神の高潔であるかが窺はれるではありませんが、又禪師は後嵯峨帝より紫衣を賜はつた、然るに禪師は辭して受けられず後勅命の重きに、遂に受けられたが、一生涯の間これを身に御着けなさらなかつたこのことであり、その時の御言葉に、  
永平雖谷淺、勅命重重々、却被猿鶴笑、紫衣一老翁、  
と、ものせられたこのことである、

禪師は實に常に紫陌紅塵の間に混し玉ふも猶ほ、孤輪の太虚に處するが如き境界であらせらるれば、高潔寡欲にして名聞利養を大に忌み玉へるを以つて、此紫衣師號を賜る如きは潔よしとせざるころである、

道元禪師の云く、

貪愛シテ、禽獸ニヒトシキコトナカシ、オモカラザル、吾我ヲムサホリ愛ス



ルハ禽獸モツノオモヒアリ、畜生モツノハコゴロアリ、名利ヲスツルコトハ、  
天モマレナリトスルトコロ、佛祖イマダステサルハナシ、

と、この訓示により如何に禪師の生涯が高潔、無爲なることを知るに足るのである。

### 四三 同情禪 其一

次に禪の境界にあつては、慈悲心、同情心とをその人格の全相となさねばならぬ、上叙の格外の妙術と云ひ、洒落と云ひ、風流と云ひ其他、脱落無碍、東涌西没、逆順縦横與奪自在の妙用を顯現する底、元より禪境の本面目なりと雖ども、その面目の存するところ、一塵、一悉く、慈愛の上に、その根底をひいて居るのである。

由來人として、此世に生れては、この慈愛の心を起し、升が實行は吾人の本務である、沙翁は云く

人は、仁慈を行はんが爲めに、此の世に生る

と、されば、

朝顔に、釣瓶とられて、もらい水、

と、これ千代女の非情にまでも、及べる愛の心を表したものである。

行水の、捨て、どころない、蟲の聲、

これ、羽毛鱗貝、禽獸蟲魚の如き下等のものにまで及ぼしたる、同情の心である。

よしやよし、世を去るとても、我心、

御國の爲に、なほつくさばや

と、これ國司信濃が國に對する熱き心を詠じたものである。

我子なら、伴にはやらじ、夜の雪、

又た、道へはたて、たては歩めと子を思ふ、我が身につもる、老を忘れて

これ親の子に對する同情である、アリス、ケトリト云く

爾が爾の隣人を、視るが如く、爾の隣人は、爾を、視ん

と、されば、この同情慈愛の心を起し願愛の言語を施すは吾人の天職である道

元禪師は愛語の徳を述べて、



衆生を見るに先づ慈愛の心を發し、願愛の言語を施すなり、慈念衆生猶如赤子の懐ひを貯へて言語するは愛語なり、徳あるは讃ひべし、徳なきは憐むべし、怨敵を降伏し君子を和睦ならしむること愛語を根本とするなり面いて愛語を聞くは面を喜ばしめ心を樂しくす、面はすして、愛語を聞くは、肝に銘じ魂に銘ず愛語能く、回天の力あることを學すべきなり、

と、これ慈愛の心、同情の精神を養ふことを示し玉ふたのである、

#### 四四 同情禪 其二

Love.....that is the answer to the enigma of life. Joubert

マニト云く、愛、これ人生の謎に對する答案なり、  
と、愛と云ひ同情と云ふ共に他を解し、他を思ひやる精神であるが、人稱よもすると、利己的箇人的の愛に流れて、たわいもない(他愛もない)ことになるものである、

或るところに大酒呑みの悴があつて、常に一升徳利に酒を買ひ、朝晩の隔て

なく飲み、その徳利こそ人生の謎に對する答案とこそ思いこんで、我親よりも我子よりも最愛なりと思を懸けて居つた、或る夜のこと、他出し十二時頃歸り來りければ、兩親及び外のものは既に床に就きてありしかば、おぼろげなる月の光をたよりに、己のよるべき、二階を指して歩み行くに、今や二階の段階に四五歩と云ふ程合のところにて、何かコソコソと足に蹴飛ばしたれば、开は何にやらんと、楷段の中途に止まり考ふらく、嗚呼彼れは、その轉び工合と云ひ、ドローモ、已れが、人生の答案と至尊視する一升徳利ならん、實に勿体なや、何れへ轉がりしか、無事平安なれ、と、兩手を合せて、口の中に物語れるを、その傍にありける爺は驢の月の光を通して、悴の様子を窺ひ兩手を合せて伏し拜める様、何んと殊勝の沙汰なりと涙を落としける、やがて夜も明け、朝に爲り、父は悴を、火鉢のもとに呼び寄せて兩眼に涙をたゞへて曰く、汝も日頃大酒を呑み、品行も修まらず、實に仕方の無き人間なりしが、されど、年を積んだ爲めなるか昨夜の仕業は何んと殊勝ではないか、以後もかくあれと云へるに、悴はいと不審に思ひ、その所以を尋ねれば、父の曰く、



汝昨夜々半に歸り來り、二階に登らんとする途中、我が入鐘頭を蹴り、知らぬ顔して行くかと思ひの外、梯子の中途に於いて、兩掌を合せ、もつたいなやと口ずさめるにあらずやと、時に悴の云く、嗚呼、昨夜のは父のハゲ頭でありしか、我は、大切な徳利と思ひ手を合せたるなり、ならもつと踏んだつて安心なものであつたと申したとのことである、

なんと不道德、親不孝ものではありませぬか、これ彼れの同情心は常に自己の徳利のみに愛の心を表して居るから、親の頭を蹴つても我が至愛の徳利を蹴つたとのみ思はない、利己的箇人的同情も余り甚しいてはないか、禪の境界にあつては、かゝる箇人的慈愛、利己的同情の偏見を嫌ひ、自利々他圓滿主義を体認して居るのである、さればこの同情と云ひ、慈愛と云ひ皆自己の天真なる衷情の流露にして心の奥底より湧き出づる噴出泉である、

知る人を知る、九州博多の聖福寺に仙崖和尚と云へるあり、常に多くの雲水を養ひ只管禪學を鼓吹して居られた、時に、誰れ云ふとなく、聖福寺の若い雲水は、博多女郎を買ひに出ると云ふ評判が高くなり、いつとなく仙崖和尚

の耳にも入いつて、仙崖和尚は格外非凡、電影裡に風を斬る底の活禪僧であるから中々聞き捨てにして置かない、成程考へて見れば、若年の學僧のことであるから、遊びに、出るも、無理はないやうなものじやが、併し此まゝに捨て措かば、佛祖不傳の惠命を相續することが出来ぬ、此身今生に度せずんば、更らに何れの生にか度せんと、焦心苦慮せられ、一夜點檢と申して、無燈で寺の境内を巡回してその様子を探られた、前三々後三々と土塀の附近を檢せられたが、何分にも土塀が高いので、出入する箇處も見あたらない、ところが、寺内の眞裏の少し横の方に土地の工合か、土塀の稍々低きところがある、ハハア此處から出入するのかと、立ち寄り見ると、下に踏み登一つ置である、さて、夜行をなすと云ふ評判のあるも無理はない此の形跡では必然遊びに毎晩出るに相違なし、これを改めさするは、正師家たるもの、本分じや、併し乍ら、考へて見れば、今宵は幾人遊びに出てたるかはしらぬが、若し表向きにすれば、今宵のもの、み放逐せらるゝこととなる、外のものとても他の夜に遊びに行かない譯でもあるまいと、仙崖和尚の眼には自利々他



圓滿の涙が充滿した、然らば、今晚は見のがさんか、イヤ／＼後來の戒めにならぬ、然らば、この蹈臺を取りかたつけんか、いや／＼彼れが歸り來たつて、足でもくじきでもせんには、實に氣毒じや、と云ふてこの蹈臺まで、そのまゝにして置かれまいと、一策を案じ、その蹈臺を取りかたづけ、已れ自ら蹈臺とならんと、老體をも顧みず、寒風の身に徹するをも意とせず、體を屈めて雲水の歸り來るを待つて居た、時正に二時と思しき頃、十五名程のもの、トコ／＼歸つて來た、例の如く、先づ一人土塀に登り、足を下して蹈臺を探ぐるに、なんだか、グリ／＼動く故、後の僧に告て云く、貴僧は、蹈臺と間違へて、石地藏でも置いたのではないかと、僧の云く否とよ、君は、あはて居るにあらずや、と、恐るゝ景色なく、大丈夫、しつかりした蹈臺だから、早く下りよと云ふより、ドット飛び下りると、仙崖和尚、何んぞ堪へらん、血氣の青年が、グット踏み下ろしたものだから、キヤンとたをれた、僧達はヤ、人だぜいと云ふより衆僧は、飛び下り來りその様子を見れば、こは仙崖和尚にてありし、時に仙崖老師、慈顔を以つて諭して曰く、拙僧が

今こゝに待ちいたるは、ドーカ御身を佛にしたいと思ふ衷情の婆心に出てたものである、これを發表すれば、御前達は下山放逐のことじやけれども野禿の衷情は今後の改心をこれ主眼とすれば、今宵の事、他言をすることなく、明日より、專一辨道あれかしと涙ながらに訓誡せられた、これを聞きたる衆僧は、大にその師家の婆心に感じ、向後そのあしき舉動毫もなさず、このこと一山の大衆の模範となり爲めに爾後一人として、夜行するものとはなかりしと云ふこれ、禪の境界にあるものゝ衷情である、吾人も亦この消息を道破して、個人的に流れず須らく斯境に入つて此三昧を我三昧といたさねばならぬ

#### 四五 同情禪 其三

埃及の古き繪畫に裸體の小兒が左の手に心臟を掲げ、右の手にて、羽の無き蜂に蜜を興へて居る古畫があります、

これ何を表したるものであるかと云ふに、この繪畫は慈悲及同情を示せる寓意畫でありまして、裸體の小兒は慈愛同情者の謙遜を表し、心臟は心の奥底よ



り衷情を流露し、喜んで、恵み思ひやるの意を表し、羽の無き蜂は、頼るべき、世の可憐兒を表し、甘き蜜は、清高にして美妙なる衷情を表したものである。

見よ!!!、世は恰も大旱の雲霓を望むが如くに、同情ある言行に渴へつゝあります、夫は妻より、同情を得んとし、妻は夫より同情を得んとし、子は親より、親は子より、弟は兄より凡夫は、佛より、聖き温き甘き同情に接せんと熱望しつゝあるのであります、されば彼のミセス、アラウニングが、街上に苦み泣きへ瘠せつゝある、貧困の可憐の童等を見て、

噫、小さき鳥は楽しく歌へど、人の子供は楽しく歌を謡ふこと能はず、愛らしき、リスは梢の間に喜ばしく遊べど、あゝ彼の哀なる人の子供は喜ばしく遊ぶこと能はず。

と、これ、生存競争の大浪に卷かれて、今にも、社會と云ふ残酷なる海底に溺れんとする貧兒を見て同情の聖火を燃したるものである。

彼の露西亞の都市、モスコイの街に容貌のまことに枯衰し、顔色は見る影も

なき貧民がありました、常に通行せる人より恵を得て居りました、或るとき、トルストイが丁度こゝを通り合せた、貧民はトルストイなるを知らずに、例の如く恵を乞ふた、スルト、又如何なる都合にや、伯は恵むべき金銭を持たなかつた、けれども伯の熱腸は同情の涙にむせび、彼の貧民に握手して曰く、「吾が最愛なる兄弟よ、我今金銭を所持せず乞ふこれを許せ」と、涙ながらに申されました、これを聞きたる、貧民は同情の聖火に動かされ日々多くの人より菓子等の切れを得るそれよりも、ほんの切を得るそれよりも、百金を得たそれよりも、清く高き歡喜の涙にせきあへず轉た感謝に堪へなかつたと云ふ、これ即ち同情禪の實行である、

昔し、智覺禪師と云ふは、もと或る所の知事であつた時にその領内が非常なる飢饉にて、途に餓え死するもの無慮、禪師は、いかにもして、この民を救ふんと苦辛焦慮、胸もかきやぶらんほど、聖火を燃し玉ひ、遂に、自分の預つて居る官金もて、その飢饉を救はれた、然るに、いかに此急を救ふとは云へ保管の官金を無断にて利用するは法理の許さざるところなれば、遂に官府に召



嘆され、斬罪と云ふことに宣告を受けた、官府は日頃評判よき知事が、今や白刃の下に倒るゝかと、いたく哀まれ、刑執行の吏に命じて云く、刑執行に際して泰然、自若、憂畏することなくばこれを許せと、愈よその時に臨むや、禪師は白刃頭上にあるも、泰然として、我命を衆生に施すと云はれとある、これを聞きたる吏は、顛末を言上しければ、天子様も一命を救ひ僧侶とせしめられた、名を延壽と稱し、これが高德智覺禪師となられたのである、何んとあり難いではありませぬか、又一枝禪師の下に出てたる慈門尼の如きは、寒中に、草菴の前に立てる幼なき兄弟の乞食の寒さを憐み、自分の着物をぬいて與へられた、

わびひとの、あはれは外に、すとさねど、

覆ふにせまき、袖ぞうらめし

と、何んと仁愛の心がけてはありませぬか、

嗚呼、同情禪は恰かも天來の音樂の如きものである!!!

噫嘻、同情禪は、人心を活かしむ靈藥である!!!

吁、同情禪は人生を樂園たらしむる生命である!!!

あゝ、同情禪は悲哀の人には喜悦の甘露となり、失望せる人には曉天の鐘聲となり、また疲れたるものには進軍の喇叭となり、貧しきものには慈惠の日光となるのであります、!!!

### 四六 火中禪

昔良秀と云へる貧しき僧がありまして、常に繪巻を好み、中にも、殊に不動尊の像を畫くことに妙を得て居りました、或るとき隣家に火事が起り延焼して良秀の家に及びました、他の家では家具物品等を焼かじと取りいそぎ運び出すにも關らず、良秀は獨り門を口に立ち出て焔々たる火勢を眺め平然として笑つて居た、時に良秀の知人が走せ來り、種々と慰め且つ家財を取り出さんことを促せしに、彼れは更に肯ずるの景色なし、知人は云く、彼れ不時の災に罹りし爲め、狂氣したるならんと、その不幸を憫みました、時に良秀笑つて曰く、我從來得意とせる不動尊の火焰はその實偽りなり、今此災にかゝ



る、始めてその真相を知ることを得たり、我れ爾後筆を執らば立ちどころに、百千の家を建て、億萬の財寶を得ん、這般の罹災憂ふること何にかあらんと、これを聞きたる、知人は大にその感にうたれたりと云ふ、良秀のこの災に罹りて平々坦々として憂畏するところなく、事に觸れて餘裕の存せるところこれ彼れが、修養の力によると云ふべきである、

彼の戦國の世に甲府慧林寺に快川禪師と云る名僧あり、大に武田信玄の歸依を受けられた、然るに武田家も遂に織田氏の爲めに滅ぼさるゝに至り、織田公禪師の徳を慕ひ、師を招きしが、禪師は、此請に應ぜられざりしかば、遂に慧林寺は火災の悲運に陥いたのである、時に禪師參禪の士を牽いて、山門の樓上に登り、端坐して畑々たる火中にあつて泰然自若として隨徒に警訓をなして云く、

安禪は必ずしも山水を須ひず、心頭を滅却すれば火も亦涼しい

と、是れ火中にありて禪を説き、禪の三昧に安住せし勝鬪である、これが古人の火水不燒溺の境界で火に入つて焼けず、水に入つて溺れざる、禪の三昧であ

る、

衆生見却盡、大火所燒時、我此土安穩、天人常充滿、

とはこの境界を云つたものである、古歌に

水や火は、心のうちの、隔てにて、

知らぬ心ぞ、佛なりけり、

と、これ所謂禪の境界である、

## 四七 死生禪 其一

この問題は古聖先徳の間に云々し來るところであるが、この問題を尤も簡明に、最も直截にその解決をなし、生死の岸頭に立ちて大自在を得せしむるものは、禪である、抑もこの生死を透脱せんには、須らく生死の人であらねばならぬ、先づ吾人をして、古聖の此問題に對して參究の跡を尋ねしめよ、

漸源仲興禪師、道吾の會下に在つて典座となる、一日、道吾和尚に隨ひ或る檀家の葬式に臨んだ、時に漸源和尚手を以て棺を拊つて、道吾に問つて云く、



「生耶死耶」

一四二

と、即これ生きて居るか死んで居るかとの簡單の問であるが漸源和尙の態度は、昨日生今死は一乎是二乎、他は暫くおく、即今底作廢生と云ふ、眼前の問題を提げ來つての問である時に道吾の云く

生とも云はじ死とも云はじ  
と、直截の答である、元より生や生の全機現、死や死の全機現であれば生と云ひ死と云ふ共に不是である、开は、元來此肉體は死して居るがその根元たる四大元素は死して居らぬ不滅じや、精神に於けるも亦そうである、併し、生きて居るかと云ふに、死して居る、死して居るかと云ふに、元より死すべき理なしじや、されば、生と云ふも不可、死と云ふも不可、一片に偏すべからずとの上より、しか答へたものである、然るに漸源和尙、更らに問ふて云く、

什麼爲か道はざる

と、問者は上叙の的意が分らないから目前に一物を留めて居るから疑團が解

けない、何んでも、眞の答を示さずに、かくして居るにはあらずやと思ひ、何故に道はざるかとの問である、道吾は何んと云はれても、上叙の見地の外に答ふべきはないから、舊によつて、

道はじ道はじ

と答へられた、問者はこの道はぬくと云ふところに道ふて居る即ち不道不道の内に千言万語を云ひ盡して居るのだが、それが分らないのだ、斯くなる

と問者も氷解するまでは問はずには、居られぬ、葬式も濟み、歸途中程に及んで、道吾和尙に向つて、

和尙須らく、仲興が與めに道ふべし、儻し更らに道はずんは、即ち和尙を打ち去らん

と、若し親しく聞かして呉れぬと和尙を打ち去らんとの亂暴じや、道吾の云く

打つことは即ち打つに任す、生とも道はじ死とも道はじ、  
と、法の爲めに身を忘れるとはこのことじや、然るに漸源は愈々進退谷つた



と見えて、遂に道吾を打つこと數拳(五六箇握りを入れた)時に道吾の云く、この事寺内に聞へなば、合山の大家、汝を打殺するであらうから、と内通して、こゝを去ることゝなつた。

去つた後、と云へとも、此生死の問題が分らぬ、それ故に石霜和尚のところへ参りて、問ふと、答へて云く、

生とも道はじ死とも道はじ

と、以前の道吾の答と同じや、何んとしてか云はざると問へば、石霜の云く、道はじ道はじ

と、首尾道吾と同一轍なれば、こゝに於て漸源は忽然として生死の問題を悟つた

とのことであるが、何んと、生死の爲めに生死の人とならねば、その解決はつかぬ、これは、禪僧の参究の面影であるが、又他に例を捕へ來るも又同死同生底の参究である。

楠多聞兵衛正成淺川に尊氏を拒ぐや愈々明日は、戰場の露と消んとする、前

日、淺川より八九町程ある廣嚴寺楚俊禪師に参じ生死の問題を實究せられた、彼れの、参問は、冷かし半分ではない、愈々明日は生死の分るゝときであるから、その参究も眞に生死の人であつた、その勢と云ふものは、獅子奮迅の勢で問ふた、即ち問ふて曰く、

生死交對謝のとき如何

と、これは死ぬか生きるかと二つ一つと云ふ場合には、ドー致したものであるかとの問じや、サア百万の大軍を前にひかへての問じやからして、面白い、普通の倫理や道徳では、こんなところの問も起るまいし、又、這般の問題を一言の元に解決は出來ない、然るに、明極楚俊禪師藝直に答へて曰く

兩頭俱に截斷して一劍天に倚つて寒し

と、即ち生と云ひ死と云ふ兩頭を斷ち切つてしまへ、ヒラリトヒラメク一劍冷やとするそこには、生もなく死もない、元より生死なくんば、生は生のまゝ死は死のまゝ脱落無碍任運無作の妙用を顯現して死生岸頭に大自在を得る、となり、これを聞きたる正成は失張漸源和尚と同様に、その消息を解するこ



とがてきないものぢやから、正成問ふて

落處作麼生

禪師は兩頭を截ち切れば、一劍天によつて寒しと云はるゝが、切斷したもので、その、落ちどころがありませう、と、普通なら、前語で悟らなければならぬのであるが、未だ合點がいかぬ、漸源の何んとしてか云はざると同一般である、まだ生死が目の前にブラツイテ居る、時に禪師震威一喝とあるから大聲疾呼して、

喝、

と、感天動地の一聲を下した

時に楠公起立して三拜通身汗流るとあつてこゝに生死の問題を悟られた、これ生死の兩頭を切斷するところ、何んぞ落處に用事あらん、と見破せられたのである、故に禪師の云く、

爾ち徹せり

と、正成述べて云く

若し來つて和尙に見すんば安んぞ向上の關捩かぎを越ることをえん、今より世々針芥はりけを失はず  
と、而してその翌日潔よく戰死せられたのであります、  
何んこの楠公の參禪は、生死の爲めに生死の人であつた、これが眞の參禪と云ふものである、

### 四八 生死禪 其二

道元禪師は、死生の福音を宣傳して云く、

ただ生死すなはち涅槃とこゝろえて、生死としていとふべきもなく、涅槃としてぬがふべきもなし、このとき、はじめて、生死をはなるゝ分あり、生より死にうつると、こころうるは、これあやまりなり、生はひとときのくらゐにて、すでにさきあり、のちあり、かるがゆへに佛法のなかには生すなはち不生といふ、滅もひとときのくらゐにて、またさきあり、のちあり、これによりて滅すなはち不滅といふ、生と云ふときには、生より外にもなく、滅と



云ふときは滅のほかにもなし、かるがゆへに、生きたらば、たゞ、これ生、滅きたらばこれ滅、にむかひて、つかふべしといふことなかれ、ねがふことなかれ、この生死は佛の御いのちなり、これをいとひてすてんとすれば、すなはち佛の御いのちをうしなはんとするなり、これにとゞまりて、生死に著すれば、これも佛の御いのちをうしなうなり、佛のありさまをとゞむるなり、いとふことなく、したふことなき、このとき、はじめて佛の心にいる、たゞし、心をもてはかることなかれ、ことばをもて云ふことなかれ、たゞわが身をも、心をも、はなちわすれて、佛のいへになげいれて、佛のかたよりおこなはれて、これにしたがひ、もてゆくとき、ちからをもいれず、こゝろをも、つひやさずして、生死をはなれ佛となる、たれの人かこゝろにとどこほるべき、

と、何んと、叮嚀なる、生死を透脱する音つれてはありませぬか、吾人にして此問題を透脱せんとするには、生死が眼前にブラサガツテ居つてはならぬ、僧あり關山和尙に問ふて云く、

生死事大、請ふ師教を垂れ玉へ  
と、時に和尙

我が道裡に生死なし  
と云はれたとあります、

これが眞の生死解脱の境界である、されば吾人は生ける此問題を解脱しなくてはならぬ、

白隠禪師の云く、

若い衆や、死ぬがいやなら、今死にやれ、

一とたび死ぬば、もう死なぬぞや、

口はさけど、一と度死なぬ、侍は

まさかのときに、逃れかくれつ

何事も、皆打捨て、死んでみよ

閻魔も鬼も、ぎやふんとするぞ、

生きながう、死んで働く、をのこ子は、

死生

一四九



爲朝が箭もつがもない事、

臍の底で、一たび死んだ、男には、

真田が鎗りも、立たぬなり

死んだとて、我儘するは、不覺悟ぞ

君には忠義、父母に孝、

と、何んと面白いてはないか、死生禪と云へば、何んでも死ぬのなんのとさは、  
ぐと思ふは不覺である、これ催眠術の人を眠らせるに反して、禪は人を活かし  
ひるものであります。

### 四九 死生禪 其三

白隠禪師の教訓の如く、活ける死生禪に安住する人は、常に心胸、廓落として、  
餘裕あり死に臨んでは、平々坦々、心緒亂れざるものがある、彼の宗謙禪師に  
参じたる不識菴謙信は、

四十九年夢中酔、一期榮花一盃酒、

と、云ひ、又生滅變化夢幻泡影の世に死の免るゝ能はざるを觀じたる大内義隆  
は、

打つ人も打たるゝ人も諸共に、

如露亦如露、應作如是觀、

と、又禪に参じたる太田道灌は、中村重頼の死に臨んで、

かいるとき、さこそ命の、惜からぬ、

かねてなき身と、思ひしらずは、

と、又自らの刺殺せらるゝ際してや、槍幹を擱んで

昨日まで、惑忘想を、入れおかし、

へまひし袋、いま破れけり、

又元徳三年逆賊高時の爲めに捕らはれ、佐渡の配所に三月廿九日を一期として  
斬首せられたる南朝の忠臣中納言資朝卿は死に臨んで、從容として、

五、蓋假成形、四大今飯室、

將首當白刃、截斷一陣風、

死生禪



の詩を賦し、又同七月鎌倉に斬られたる俊基朝臣は、その死に臨みてや、

古來一句、無生無死

万里雲盡、長江水清

と、神色自若として死につける如き、これ死生透脱底にある人の三昧である、されば禪の境界にある人は、この三昧にある人である、この三昧にある人は元より死の死として恐るゝことく、生の生として喜ぶことなければ、その心的状態を把住して見るも、非常に妙味を持つて居る、その云ふところも亦自然的である

彼の有名なる誠拙和尚が鎌倉圓覺寺在住のとき、その信者なる深川木場の白木屋の一人娘が大病であると云ふので醫療投薬、いろ／＼手に手を盡したが癒らない、醫者も匙を投げ、今に息の引取るを待つばかりと云ふ始末この上は神佛の加被力を受くる外なしと、就ては平常信仰せる誠拙和尚を勸請して、祈禱を請ふと云ふので飛脚を立て、迎へた、スルト誠拙和尚は其れは氣の毒じやと云ふので駕に乗つて、來られた、時に主人は泣く々々娘の病氣の始末を

のべ、是非御僧の力にて御祈禱を願いたいと願ひに、和尚の云く、よしよし頼みに任せて祈禱もしやうが、御布施を少々多分に戴きたい、それも後金でなく前金に願いたいと注文ゆへ、主人も、娘の病氣が全快するとあれば、財産の半分は差上てもよいとのこと、和尚の云く然らば、金百兩に米百俵を願いたい、と、主人これは、聊か多過ぎるとは思へども、娘の命にはかへられざれば、承諾し、早速人夫をして鎌倉へ輸送した、而して和尚はちつさ拂いて、佛間に入り心經一卷を読み、終つて娘の枕もとに行き、娘に宣告して云く、御身も此の大家に生れて別に榮華もせず、死ぬとは氣の毒じや、併し、人間と生れきては、一度は死なねばならぬ、此定命と云ふものは、神でも佛でも、動かすことは出来ぬは、御身も、この場に臨んで、誰れを恨むにも及ばぬ、併し、御身もよいことをした、それは、御父さんが、御身の御経料として米百俵に金百兩の御布施を呉れたが、あの御布施は、何にも贅澤をするのではない、拙僧の禪堂には何百人と云ふ參禪の坊主が居る、あの米と金は彼等を養ふ料にするのじや、あの中には、一人や二人は、佛になりそ



うなものもあるらしい、あ、御身も此死に際には、未來の佛を養ふ善根、功徳を積んだのじや、世の中にこれ程よい行はない、安心して死ね、と云ふて、病室を出て、嗚呼、愚僧は、これから増上寺へ遊びに行くのぢやと暇を告げられた、

あとて主人は、何にか有難い御祈禱があるかと思ひの外、箇様の始末なれば、非常な立腹、死ぬ死ぬとは、何んのことだと、糞坊主呼びをしたとのことである、而して、今にも息を引きたらんする程の娘も、和尚の生の喜ぶべきなく、死の恐るゝなく、定命の動かすべからざる垂誠を聞き、頓と安心したものと見え、日を追ふにつれ、漸々快癒し、數日にして全快したとのことである、

何んと有難い話してはないか、兎角醫者より死の宣告を受けた娘が、和尚の垂訓により、全快したとは、何んと以心傳心ではないか、たとへ此娘が全快せずとも、和尚が死の宣告を受けた娘に對して、定命の動かすべからざるを説き、死中に活を説き、活中に死を説ずるところはこれ和尚の死生禪の三昧にありて

三昧を行ぜられたと云ふべきである、

雲にか、今宵の月を、まかせてん  
いとふとしても、晴れぬもの故、

この解脱の境界これを吾人の境界とせねばならぬ、

世の中に、生死の道に、つれはなし、たい淋しくも、獨死、獨來、一休禪師  
生死事大、のかれは無ぞ、諸人よ、昨日の夢か、今日も覺ねば、一覺芝禪師

通俗新話 參禪の活路

終



明治四十一年十月六日印刷  
明治四十一年十月九日發行

(委辦の活路)

定價金五十錢

著者 神谷篤倫

發行者 森江佐七

印刷者 岩本正治



# 發行所 發賣所

東京市飯倉町五丁目

換替口座 參七貳番  
電話新橋 二九七二番

森江本店

森江分店

大阪市 文積社  
北久太郎町

## 特約 賣捌

- 誠進堂 鈴木書店
- 東京堂 光融館
- 前川 林書店
- 目黒書店 榊原書店
- 村松書店 鶴屋社
- 佛敎館 淨土淨報社
- 具葉書院 法藏館 (久留米市)
- 法文館 法林館 (廣島市)
- 出雲寺書店 藤井書店 (長岡市)
- 興敎書院 顯道書院 (新發田)
- 文光堂 星野書店 (水原町)
- 川崎書店 其中堂 (長崎市)
- 菊竹書店 (長岡市)
- 洗心書房 (靜岡市)
- 愛媛書店 (岐阜市)
- 四村支店 (仙臺市)
- 四村書店 (山形市)
- 長崎書店 (小田原)
- 四澤書店
- 吉見書店
- 都文堂
- 藤崎書店
- 牧野書店
- 積善堂



257  
656

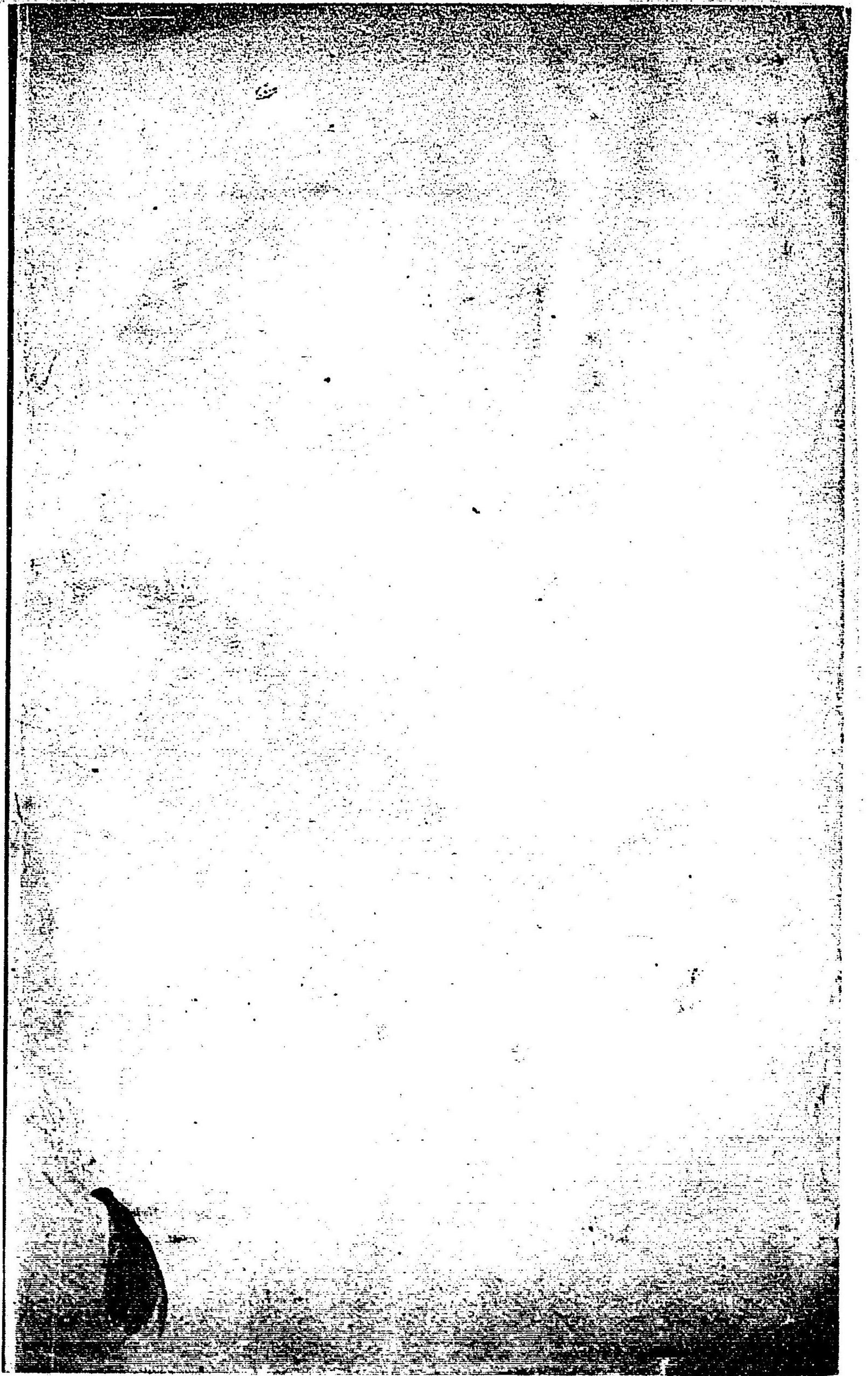
加藤咄堂君新著

第二版  
**心の研究**

正價金五十錢  
郵税金六錢

移りゆく始め終りや白雲の  
あやしきものは心なりけり  
心とは何ぞや  
これ何人も知らむと欲  
して知る能はざる大  
疑問なり本書  
は咄堂君が  
東西古今の學說  
を網羅し先づ心に對する研究の變  
遷より哲學  
心理學の發達に及び  
更に俗話傳  
説に考へて  
神秘の人心の感應  
幽靈の有無  
幻術の並  
催眠術の學理  
等例を擧げ理を示し  
性を説き情緒を示す  
人心の根底  
と宇宙精神との  
關係を論じ文章  
平易所論明晰、一讀以て此大疑問を解決する事を得む











特21

820

通俗禅話

参禅の活路

神谷篤倫

国立国会図書館

019462-000-1

特21-820

参禅の活路

神谷 篤倫/著

M41.10

ABG-0183

